げんこつ団

# グレート・ノーマル

2022年 11月9日(水)〜11月13日(日) 小劇場楽園

植木 早苗
春原 久子
河野 美菜
三明 真実
丹野 薫
久保田 琴乃
藤岡 悠芙子
柏尾 志保

脚本　一十口裏

映像・音響・演出　一十口裏
振付・演出　植木早苗

照明　山岡茉友子
舞台装置　畠山秀樹

音響オペ　吉田有花
映像オペ　信広天音

舞台後方に壁。壁の中央上半分は窓になっており、ロールカーテン（スクリーン）が開閉出来るように。
直方体の箱４つは、冒頭は重ねられており、コンビニのレジカウンターとして使われる。
※当然全編、どんな役でもどんな流れでも過不足ないリアリティを持って演出、演じられること。

**24年前**

開演時刻で客入れ音楽少し大きく。客電オフ。音楽オフ。屋外放送サイレンが鳴る（口頭）。
サイレンの終わりで窓の向こうのみ、明転。
窓の外には区役所職員三名が立っており、佐久間（女）がアナウンスを、職員1（女）がそのエコーを、職員２（男）がノイズ音を、それぞれ口頭で言う。

佐久間　ただいま（エコー、ノイズ）低化学スモッグが発生しております（エコー、ノイズ）。お急ぎでない方の外出は（エコー、ノイズ）危険ですのお控えください（エコー、ノイズ）。繰り返します（エコー、ノイズ）ただいま（エコー、ノイズ）低科学スモッグが（エコー、ノイズ）

そこにホイッスルが聞こえ、職員ら、発声をやめる。警官がやってくる。

警官　なに？　テイカガク？
佐久間　あ、はい。（職員1と2、エコーとノイズ）
警官　…コウカガクじゃなくて？
佐久間　ええ（ここから一気に言う。そこにいちいちのエコーとノイズ）光化学スモッグは主に工場からの排ガスに含まれている窒素酸化物や炭化水素が太陽の紫外線で酸化性の強い光化学オキシダントに変わることによって発生し、それが頭痛や喉の痛みを引き起こしますが、
警官　（職員二人に近づかれる等して）ちょっと、
佐久間　今はそれが低科学オキシダントに変わっておりますので（エコーとノイズ更に激しくなって）
警官　（それを振り払い）いやでも！光化学スモッグの光化学って確か、高い低いではなくて…
職員1　（警官を突き飛ばし）ええごめんなさいね（佐久間がエコー）私達そういう事は全然。
職員2　（警官に詰め寄りつつ）ええ分からないんですよ（佐久間がエコー）このスモッグのせいでそういった科学力に対する理解の度合いとかそういったものがもう、著しく低下してまして。
職員1　（警官に詰め寄りつつ）ええ数学・物理科学は勿論のこと（佐久間がエコー）、生物学等の自然科学も、言語・哲学・倫理に至るまで、このスモッグの煙に巻かれてもう有耶無耶に、
警官　ちょっともう、やめて下さい！

同時にけたたましいホイッスル音が聞こえ、職員ら思わず静まる。

警官　つまり、この霧のせいで。
職員2　はい。防災無線が壊れても直せませんし、

ホイッスルが短く鳴る。職員ら、どこからか鳴るホイッスルが気になる。

職員2　もし直せたとしてもその使い方がもう、

ホイッスルが短く鳴る。職員ら、ホイッスルが気になる。

職員2　なので仕方なく……、

ホイッスルが少し長めに鳴る。職員ら、ホイッスルが気になり、先を続けず。

警官　…そうですかー。でもまあね。ここはほら、そんなに道幅も広くないし。ちょっと迷惑なんでどこか別の場所でね。（手帳を取り出し始め）

職員1　あの、

警官　はい？（職員1を見る。同時にとても短いホイッスル音）

職員1　（辺りを見回しつつ）どなたか他に警官さんが？

警官　はい？（ホイッスル）

佐久間　いやさっきからホイッスルの、

警官　ああごめんなさい、僕の鼻です。（ホイッスル。手帳を捲って）あ、この辺だとほら、小学校がありますからそこの屋上なんかは、

職員1　（警官の手を掴んで）鼻？

警官　ええ今、学校に連絡入れさせますんでそちらの方へ移動を（無線を手にする）

職員1　え？　鼻？

警官　ええ、ちょっと鼻炎気味で。（ホイッスル。無線に）あ、こちら五丁目派出所の、はい、

職員1　（警官から手を離す）

警官は無線を続け、目出し帽を被った、明らかな強盗（ケンジ）がやって来る。

ケンジ　あ、すいません。この辺に銀行ありませんか。

警官　（無線聞きつつ）あー銀行はないんだけど、あ、そこのコンビニならATMが、

ケンジ　あー確かあったと思ったんですけど、コンビニかー…

警官　（無線聞きつつ）前あった銀行は全部潰れちゃったんで。だからもうそこのコンビニしか、

ケンジ　そうですか…、分かりました。

職員1　（思わず警官に駆け寄り）え、ちょっと待って下さい、この人、

ケンジ　あっ、（職員1を押し退け警官の拳銃を取る）

職員1　あっ、

警官　何を、（素早くケンジの腕を取り拳銃を奪い返し構える）

全員　…！（一瞬の緊張）

警官　（職員1を撃つ）

職員1　（死ぬ）

警官　（死んだのを確認して）…ああ、大丈夫ですね。はい、どうぞ、使って下さい。（拳銃をケンジに渡し笑って）ごめんなさい、しばらく使ってなかったもんで。

ケンジ　あ、有難うございます。すみません。

警官　よかったらあとでそこの派出所に返しといてくれれば。

ケンジ　分かりました、じゃ。（会釈して去っていく）

警官　お気をつけてー。（無線に戻る）はい、じゃ、よろしく。

佐久間　え…（職員1に駆け寄る。※窓の外は下部が見えない状態なので客席から職員1はもう見えない）ちょっと…

職員2　あれ強盗ですよね？　追って下さい、

警官　（思わず吹き出し）やですよ、怖い。

職員2　怖い？

警官　だって危ないでしょう？

職員2　（警官に掴みかかり）あんた、

警官　（素早く警棒で殴りつける）

職員2　（気を失い倒れる　※客席から見えなくなる）
警官　（無線を仕舞いつつ佐久間に）はい。小学校に連絡入れたんでとっとと移動して下さい。…あ。あとその前に、（警棒で脅しつつ）こうなりたくなければそこのコンビニでアイス買ってきてくれませんか。ラクトアイスじゃないやつ、アイスミルクかアイスクリームの。
佐久間　…職務倫理が？
警官　は？
佐久間　（霧を見回して）職務倫理もなの…？
警官　（ホイッスル）だからほら早く
佐久間　（ホイッスルに怯え）鼻を噛んで下さい！
警官　え？（ちょっとリズミカルにホイッスル）
佐久間　分かりました！分かりましたから、鼻を噛んで下さい！（逃げ出す）
警官　あっ、急いで下さいよ！　何かある前にお願いしますよ！（追う）

二人退場同時に、舞台上明転。コンビニ。初老の男とキミが居り津久井コズエがレジに。そして、

コズエ　（キミに）ごめんね、ちょっといい？（キミの持ったパンかおにぎりを取って）駄目だよ、これ、ぎゅっとしちゃ。ほら、こんなに潰れちゃった。ね？
キミ　…。
コズエ　ほらこれも（棚から他の商品を取り）あなたでしょ？　ああもう、こんなに小さくしちゃって。
キミ　…。
コズエ　これは売り物なの。これじゃもう売れなくなっちゃうの。ね？　あなただってこんなの買いたくないでしょ？
キミ　（首を横に振る）
コズエ　ん？　これ買うの？　買いたいの？
キミ　（頷く）
コズエ　じゃあお金は？　ある？
キミ　…。
コズエ　お金持って来てないんだったら駄目だよ、買えないよ。
キミ　（牛乳とスイーツも掴んでぎゅうっとしていく。飛び散る牛乳やクリーム。）
コズエ　あっ、ちょっとやめて！　待って！
キミ　（コズエをぎゅっと掴む）
コズエ　あっ、駄目だって、ぎゅっとしちゃ。ちょっと、
キミ　（かなりの力で抱きしめ、ぎゅっとする）
コズエ　（気が遠くなりながら）駄目だって…
キミ　（全身で店員を丸めてぎゅうと圧縮していく）

同じ制服の店員（男）、やって来る。

店員　津久井さん駄目だよ、店内から目を離しちゃ。
キミ　（コズエを離す）
コズエ　（やっと息が出来て）は……
店員　どうしたの。
コズエ　ああ、またこの子が…、
キミ　（店員らから逃げて一旦店を出る）

店員　ああ、あの子。どこの子なんだろ。こないだも色々と片っ端からぎゅっとしちゃってさ。ほら。（丸い球をコズエに投げる）

コズエ　（キャッチして）これは？

店員　店長。

コズエ　えっ

店員　何でもぎゅっとしちゃって困ってるんだよ。親に連絡したいけど何聞いても何も言わないし。

コズエ　（恐々かまじまじか球を見ている）…店長？

店員　ああ。

コズエ　（思わず球を手放す）

店員　（その球を拾い手遊びながら）それより今、俺、裏で防犯カメラ見てたんだけどさ、

コズエ　（球から目を離せぬまま）あ、はい、

店員　（激しくドリブル等しながら）そこの爺さん、怪しいから。こないだからちょこちょこ来てるんだけど、何も買わないしキョロキョロしてるし。だからそういうのちゃんと見といてよ。

コズエ　（球から目が離せず）

店員　ねえ津久井さん、聞いてる？！（球をバックヤードに投げる）

コズエ　あっ、ごめんなさい。何て言ってました？

店員　だからあの爺さん怪しいから。そういうのちゃんと見とかないと駄目だよ。

コズエ　あ、すみません。

店員　そろそろ新しい店長来るし、ちゃんとしてよもう。

コズエ　あ、はい。

佐久間、急いで入店。コズエ、爺さんを見張る。

佐久間　あ（辺りを警戒しつつ）、アイスってどこにあります？

店員　そこです。

佐久間　有難う（とテキトーに掴んで）じゃこれ下さい。

店員　はい。（レジを通し）二百四十三ディルハムです。

佐久間　はい？（ポケットを探っていた手が止まる）

店員　二百四十三ディルハムです。

佐久間　いえあの、ディルハムって、

店員　あ、ドバイの通貨単位ですね。

佐久間　ドバイ。

店員　ええ。

佐久間　でも（思わず辺りを見回す）

店員　あ、（看板を見て）ここ、こないだオイルダラーに買収されたんで。

佐久間　オイルダラー？（看板を見て）デイリーヤマザキが。

店員　いえオイリーヤマザキです。

店内放送でアラブ音楽が流れだす。

店員　（アイスとバケツを差し出し）で、原油はどうします？

佐久間　え？

店員　（アイスをバケツに放り込んで差し出し）いりますか？

佐久間　あ、レジ袋じゃなくて、

店員　ああその原料ですね。どうします？

佐久間　あ、いやでも私、ディルハム持ってなくて、
店員　あ、そこのATMで両替出来ます。今、凄い高騰しててこのアイスだと（レジ見て）日本円で五万六千円くらいですかね。
佐久間　え、
店員　どうします？
佐久間　（バケツを覗き）でももうアイス、原油まみれだし、
店員　原油代は五千六百ディルハムで。
佐久間　そんなに！
店員　オイルダラーなんで。（バケツを差し出して）はい。どうします？
佐久間　（バケツを突き返して）いやごめんなさい、やっぱりやめます！
店員　え？
佐久間　あ、いえちょっと待って下さい…！ちょっと待って、（一旦、レジから逃げる）
店員　……なんだよ。
コズエ　（爺さんを見張っていたが）またですか？
店員　ああ。
佐久間　（端っこでポケットから長財布を出し考えている）
コズエ　（それを見て）しょうがないですよ。物価高すぎですもん。
店員　まあ俺も、とても買えねえけど。
佐久間　（店員を見る）
コズエ　時給は日本円ですからねえ。でも、お陰でやっと働き口見つかったんで。（色気を出す）
店員　ああうん。
コズエ　だから頑張りますから。（色気を出す）
店員　ああうん。で、どう？爺さん。
コズエ　あ。（色気、諦める）万引きです。
店員　やっぱり。（爺さんに）おい！
コズエ　あ、でもまだなんです。（それを引き留め）
店員　え？
コズエ　まだ何も、

コズエと店員、爺さんを見る。爺さんは辺りを見回し上着の内ポケットを開き、商品に手を伸ばすも躊躇し、やはり商品を手に取らない。

コズエ　ずっとあんな調子で。
店員　爺さん！
爺　（唐突に）あっごめんなさい！　許して下さい、ごめんなさい！（突然逃げ出す）
店員　おい！（慌てて捕まえる）
爺　勘弁して下さい！（とても謝る）
店員　お前万引きか？
爺　はい、そうです…（観念）
店員　じゃあちょっとこっちへ（爺さんをバックヤードに連れて行こうとする）
コズエ　（それを止めて）あ、でもまだ何も万引いてないんで！
店員　じゃあ万引きじゃないじゃん。
爺　（コズエを振り切り）いえ！万引きです、万引きなんです！（とても激しく主張する。しつこく主張する）私、万引きですから！（店員にまとわりつく）

店員　（それに押されて）なんだよ面倒臭えな、じゃ、さっさと万引けよ、欲しいんだろ？　この弁当が、このスイーツが、あ？　美味そうだもんな、あ？
爺　（商品を見て唾を飲む）

さきほどの強盗（ケンジ）、拳銃を一発発砲しながら入店。店内放送音楽、発砲でカットオフ。

佐久間　（悲鳴）
ケンジ　強盗だ！
店員　あ、すいません、そちらに並んで下さい。
ケンジ　え？
店員　こちらの方が先なんで。（爺に）はいどうぞ。
爺　あ…

全員で爺さんを見守る。しかし爺さん、やはり勇気が出ずなかなか商品を手に取れない。

店員　万引きしないなら出てって下さい。（ケンジに）お次お待ちの方、
爺　あ、待って下さい、今やります、今！（と慌てて商品を手に取るもやはり出来ず放り投げる）あー！
店員　（爺の首根っこを掴み）…こっちは忙しいんだよ。いっつも怪しい動きしやがって。あ？　もう一ヶ月は来てるよな。（レジ台に爺の頭を押し付け小さなモニターをレジ裏から出しそれを操作し始める）
コズエ　（爺さんに）そんなに？
爺　いえ半年です、
ケンジ　おい、（拳銃を店員に向ける）
店員　（操作しながら）毎日いちいち警戒すんの面倒なんだよ、
ケンジ　おい！（拳銃を店員に向ける）
店員　（それを掴んで退かし）うるせえ！順番だ！（爺さんに）ほらこのカメラにばっちり映ってんだよ、今巻き戻して、（また操作）
ケンジ　（コズエに銃を向け）おい！何でもいいから金を出せ！
コズエ　あっ…
ケンジ　あるだけ全部、この鞄に入れるんだ！（鞄を投げる）早くしろ！
コズエ　はい！
店員　（操作しながら）こんなもんを毎日チェックして、俺は、
ケンジ　早くしろ！
佐久間　（悲鳴）
コズエ　（店員に）ねえお願いもうやめて。万引きはもういいからレジを、
店員　うるせえ！（ケンジに）そこの線の所で待ってろ！（ビデオを覗き込む）
コズエ　（店長を止めようとして）もうやめてってば！
店員　（ビデオを操作）ん？　なんだこれ…

ビデオから女の喘ぎ声が聞こえ始める。ＰＣモニターは客席からは後ろ向き。

声　「ああっ、いいっ、（ウィーン）もっと（ウィーン）ああもっと（ウイーン）もう一回（ウイーン）ああもっと強く！焦らさないで！（ウィウィウィウィ）」
店員　……え？（コズエを見る）
コズエ　……ごめんなさい！
全員　……。（コズエを見る）

コズエ　（その視線を受け）でもだって、夫が事業に失敗して、失踪してからもう三年も経つんです…！
店員　いやでも…
コズエ　分かってます！だからってこんな…。でも私、寂しくて…耐えられなくて…
店員　でもだからって…、自動ドアでこんな。
全員　（反応。ＰＣモニターを見る。ケンジは目出し帽を取る。）
声　「ああっ（パコッ）やめて（パコッ）ああ凄い！（パコパコパコパコ）」
店員　ああ今度はゴミ箱で。
声　「ああ入れてお願い（パコ）」
ケンジ　あ、入ってった。
声　「ああもう出して！（パコ）」
ケンジ　あ、出てきた。
店員　え。レジ横のあんな小さなゴミ箱に（ビデオに釘付け）
ケンジ　どうなってるんだ？（ビデオに釘付け）
佐久間　……。（コズエを見る）
コズエ　お願いします、やっと見つかった働き口なんです！（店員に）許して下さい、夫の借金でどうしようもなくて、娘に食事も与えられなくて、（佐久間に）だから虐待を疑われて児童相談所に連れてかれて、でも、このお陰でようやく引き取れそうなんです、今年小学生になるんです…！
全員　…。
コズエ　（一人で）父も引き取りたいんです、どんな施設に入れられてるか。どんな生活をしてるか心配で心配で…
店員　ちょっと落ち着いて、
コズエ　（店員に）もう三年、いやそろそろ四年になろうとしてます、夫のことはもう諦めてます！　もう死んだものと思って、私一人で頑張っていかないと、だから…

ケンジ、ビデオを消す。キミ、球（店長）をドリブルしながら入店。

店員　あ、店長？　店長！
コズエ　え？
店員　（キミに）お前、新しい店長も！
キミ　（店員に向かって挑発的にドリブル続ける）
店員　おい、返せ！（球を奪おうとしバスケの試合状態になりながら）店長！大丈夫ですか？　今とんでもないビデオが、
コズエ　…！（バスケの試合状態で球を奪う）
きみ　…（それを奪う）
店員　…（違反行為に出る）
佐久間　（それを見て）あっ、ファウル。

ホイッスルの音がする。窓の外、明転し、同時に警官がやって来る。

警官　ああもう。何か始まっちゃってる。
ケンジ　もう誰も動くな！　静かにしろ。
警官　（無線に）応援お願いします、五丁目三番地のコンビニでケンジ事件発生。
ケンジ　少しの間でいいから静かにするんだ。
キミ　…（店員の後ろ首に唾を吐く）
店員　（激昂）何しやがんだ、この糞ガキ！（キミに掴みかかり）
警官　こちら五丁目三番地四号、

ケンジ　やめろ！（キミを殴ろうとした店員を撃つ）
店員　…！（ふっとんで死ぬ）
佐久間　（悲鳴）
警官　至急、応援願います、至急、応援願います、
ケンジ　（キミに近づきその顔をよく見る。少し間のあと）……お前、……キミか…？
コズエ　（反応）
ケンジ　お前、キミなのか…？
コズエ　（唐突な奇声）…え。キイちゃん…？　嘘！（キミの顔を掴みよく見て）キイちゃん？！え？（ケンジを見る）なんで……
ケンジ　（信じられないほど驚く）コズエ…？！
コズエ　（あり得ないほど驚く）え…！　あなた？あなたなの？！　嘘！
ケンジ　（信じられないほど取り乱す）え、なんで、あ、え、（など）
コズエ　（あり得ないほど取り乱す。そして）なに、どうして、あ、（そして）…え？　じゃあ、もしかして……

ケンジとコズエ、爺さんを見る。爺さんも三人を見る。

コズエ　（あり得ないほど驚く）お父さん…！
爺　コズエ、か…？
コズエ　（驚きのまま）ああ、お父さん！どうしてこの店、
爺　たまたまだよ、ケンジくん、どうしてこの店に、
ケンジ　たまたまです！
爺　そうか…！
コズエ　じゃあ、

ケンジとコズエと爺、佐久間を見る。しかし互いに「他人だな」と思う。

コズエ　（キミに）ああキイちゃん…。あなたは、分かって来てくれてたの……？（抱きしめて）ごめんね……
キミ　（抱き返さないし表情もあまり変わらないが恐らくとても嬉しい）

遠くからヘリコプターの音が近づく。

警官　（拡声器を持ってきており）こちらは五丁目派出所、ここは完全に包囲されている。直ちに人質を解放し、武器を置いて出て来なさい。

全員、静まる。互いを見つめる、間。

ケンジ　……本当に悪かった。どう償えばいいか分からないけど、俺…。（そして銃を捨て出て去ろうと）
コズエ　（銃を拾ってケンジに向ける）待って。行かないで、お願い。
警官　（拡声器で）ここは完全に包囲されている。武器を置いて出て来なさい。
ケンジ　（窓の外を見て）でも…
コズエ　だってあなた私たちのために…。でも世の中が悪かったの。仕事が失敗したのだって、借金の金利が急騰したのだって、全部……。だから、
ケンジ　コズエ…
コズエ　だから私、怒ってない。…もう、離れたくない。

ヘリコプターの音が増え、更に近づいてくる。コズエとケンジ以外、上空を見上げる。

警官　（拡声器で）今、応援が到着し、ここは完全に包囲されている。

コズエ　だからもう二度と、去っていかないで。

見つめ合うケンジとコズエ。

更にヘリコプターが近づくと、そこからリズミカルなリズムと音楽が聴こえてくる。

それと共に声が聞こえてくる。ケンジとコズエは見つめ合ったまま。

チア　5、6、7、8、Are you ready? Let's go! Yell

佐久間　（チアリーダーを見て）あ、応援が、

ボンボンを持ったチアリーダー、リズミカルに窓の外にやって来て、警官を応援する。

警官の鼻が鳴り、リズムに合わせてホイッスルが鳴る。ケンジとコズエは見つめ合ったまま。

佐久間　ほら、凄い応援が来てます、ほら！

チア　Go! Go! Come on fans! stand up and yell

警官　だから速やかに出て来なさーい！

ケンジとコズエは見つめ合ったまま、音楽が大きくなる。コズエ、窓のロールカーテンを下ろす。

警官らは見えなくなり、そのまま映像イン。舞台上暗転。

---

**OPENING**

タイトル。霧に包まれていく街。

上空からの映像から、窓のロールカーテンが全てピッチリと閉まった、コンビニの映像。

声　「中野区中央五丁目のコンビニで発生した強盗立てこもり事件ですが、犯人は警察の呼びかけに一切答えず、事件発生から三日経った今も、全く動きがありません」

普通の叔父さんと叔母さんが踊り狂う。「ノーマル」の類義語の数々。

再びコンビニ。

声　「人質の安否が気遣われる中野区コンビニ事件ですが、犯人からの要求が何もないまま今日で三ヶ月が経過しました。店内の食料も尽きたかと思われる状況に、警察は食料や飲み物を差し入れ…」

普通のスーツ姿の男女が、踊り狂う。「ノーマル」の類義語の数々。

再びコンビニ。

声　「今日で発生から三年目を迎えましたコンビニ立て篭もり事件。今日も時折、楽しそうな一家団欒の笑い声が聞こえてくる以外に、特に大きな動きはありません。警察は、日勤夜勤の交代制で監視を続け、近くの弁当屋が毎日欠かさずに差し入れをしています」

コンビニ店外の監視カメラの映像。

**24年後**

監視カメラ映像のまま、前出のキミが前出の監視カメラ用ＰＣを持ち、それを見ながらコンビニバックヤードからやってくる。穏やかな朝。
キミは前シーンの子供服のままだが、サイズが異様にピチピチである。体も動きも大人である。
ケンジやコズエも前と同じ服装だが、髪は白髪混じりになっている等。

コズエ　（バックヤードから来て）ああキイちゃん、顔洗ったの？
ケンジ　（段ボール箱持ってバックヤードから）そろそろ朝ご飯だ。それ置いて。（腰をさする）
爺　（段ボール箱持ってバックヤードかから）あー…（明後日の方向に歩いていく）
コズエ　（爺さんに）お父さん、ほらこっちこっち！（ケンジに）あなた腰大丈夫？
佐久間　（慌ててやって来て）ああお父さん！私がやりますから。（爺さんの段ボールを取る）
コズエ　いいんですって。もう色々やらせないと頭も体も。
ケンジ　（爺さんの耳元に大声で）お父さん、ここに座ってください。
コズエ　キイちゃん、顔洗って歯磨いてきなさい。
ケンジ　あ、みんなお茶でいいな。
佐久間　ああすみません。

段ボールを中央に置いて囲んで座り、ケンジはお茶を入れに歩く。
キミはＰＣを段ボールの上に置き、ポケットから漫画単行本を出して読み始める。

佐久間　（バックヤードに）カイちゃんご飯よ、来てー。
開閉　（キミ同様にピチピチの子供服を着た男。バックヤードから笑いながら来て）姉ちゃん今日も顔洗ってないよ。
ケンジ　そう言うお前は洗ったのか？（と、開閉の近くを通り過ぎる）
開閉　（ケンジが近くを通ると）ヴィーン（と無表情で手足を閉じて、開く）
ケンジ　あれ？ポットはどこにやったかな。（とまた、開閉の近くを通り過ぎる）
開閉　ヴィーン（と、手足を閉じて、開く。そしてまた閉じる）
コズエ　ああ確かあっちに。
佐久間　あ。（開閉に）カイちゃんほら、挨拶はした？
開閉　あ。（表情戻り店の入り口の方へ行って、入り口に向かって）おはよう、父さん。

前出と同じ自動ドアの音、ヴィーンと鳴る。

コズエ　開閉。開閉。あんた昨日ポットで遊んでたでしょ。どこやった？
開閉　え？母さん。知らないよ（と、言い終わらぬ内にケンジに当たって開閉を繰り返す）ヴィ、ヴィ、

開閉の服には「開閉」の文字がプリントされている。

佐久間　まあいいじゃないとりあえず。そろそろだし。（とＰＣの映像を見る）あら？
コズエ　（映像見て）ああ店の裏のカメラになってる。（操作して）ほら、表の映像。
佐久間　（映像見て）ああ来た来た。
ケンジ　（食卓に戻り）あ。おいキミご飯だぞ、もう漫画やめろ。

開閉、コズエの隣にぴったり座り、キミは漫画をやめない。
前出の警官、入り口からやって来る。髭を生やし、腹が出ている等。

警官　ああどもども。おはようございます。
皆　（口々に）おはようございます。
警官　ああほら。あれ。
ケンジ　え？　ああ。（と、ポケットから拳銃を出して家族に向け）それ以上近づいたら、こいつらの命はないぞと。
皆　（わざとらしい悲鳴）
警官　はいどうも。一応ね。形だけでもこう、立てこもっておかないとね。
ケンジ　ええ。お陰さまで。
警官　つって。近づいちゃうんですけどね。
ケンジ　どうぞどうぞ。
コズエ　いつも監視ご苦労さまです。
佐久間　どうぞ休んでって。
警察　ええ、すいません（と、座ろうとすると、ポコンとボールを叩くような音がする）えっ！何　何の音？（もう一度座ろうとするとまたポコン）えっ？！
佐久間　（音の出どころに気づいて）ああ警官さんの、膝ですね。
警官　膝？私の？
佐久間　ええ。
ケンジ　（警官の膝を見て）あー。年食ってくるとどうしてもね。
警官　そうか。いや参ったな（座ろうとすると女の声で「そーれ！（ポコン）ヘイ！（ポコン）ナイス！（ポコン）」と聞こえる。そして座って）あー。（と膝を伸ばすと、ザザーと波の音）
佐久間　…。なんでビーチバレー？
警官　（PC映像を見て）あ、キッチン井上さん、来ました。

「キッチン井上」と書いた血まみれのエプロンをつけサングラスをかけた、明らかにヤクザの凄みのある男（瀬尾）。大きな紙袋を持って入り口からやって来る。

瀬尾　はい。キッチン井上。
ケンジ　え？　…井上さん？
瀬尾　ああ、井上だ。いつものように差し入れ持って来てやったから。
コズエ　あの。髪型…だいぶ変えました？
佐久間　ええ、だいぶ印象が…
瀬尾　ほら朝飯な。今出してやっから。（と紙袋から、血まみれの手首を取り出し）あ？　（戻して、今度は髪を掴んで男の生首を半分ほど出して）あ？
ケンジ　あっ、井上さん…？
瀬尾　（すぐに戻して、紙袋を探る）どこだ…？
警官　（家族の様子に）いやここだけの話、ここの監視と差し入れ業者に結構な手当が出てるもんで。ほら、一応命懸けなんで。
瀬尾　（サングラスを外し）ああ、そうなんですよ。
警官　まあ。だから。（分かるでしょ？の笑顔）
瀬尾　ええ。だから。（分かるでしょ？の笑顔）
ケンジ　（紙袋を見て）……はあ。
警官　ああそうだ。やっぱりね、テレビやネットは引けないそうです。差し入れも食事と水やお茶のみで。本や雑誌なんかも…
ケンジ　ああ。

警官　あくまでも立てこもり中ってことで。
ケンジ　でも、
瀬尾　あんたらさ、何もしないで飯食えてんだ。それだけで、奇跡だよ。
警官　ええ。ここは天国ですよ。
瀬尾　だからあんたらは、ずっとこうしてればいい。（くつろぐ）
警官　ええ。そうして下さい。（くつろぐ）
ケンジ　でも、
瀬尾　…ん？何読んでんだ？（キミの漫画を取り上げる）
コズエ　あ。「お代官ちゃまＳＯＳ!!」の13巻です。この子これをもう毎日ずーっと。
瀬尾　面白いのか？
コズエ　いえ全く。
佐久間　でもあの日ポケットに入ってた、それしかなくてね。
キミ　（漫画を奪い返してまた食い入るように読む）
瀬尾　あんたら（キミと開閉を見て）、もういい年だろ。
コズエ　キイちゃんは三十、カイちゃんは二十四です。（開閉の頭を優しく撫でる）
瀬尾　（二人を見る）……。
ケンジ　でも、今更ながら恐縮なんですが私達も、あの、もう少しだけでいいんで、ほら、外の皆さんのような、ね？こう、普通の生活をちょっとね…とか（家族に同意求める目線）ね、そろそろ、

外で爆音。騒つく人々の雑然とした声が聞こえる。

佐久間　なに？（ＰＣを見る）
ケンジ　（ＰＣを見る）あっ、なんだこれ。
コズエ　（ＰＣを見る）あ、あの人、角材？持ってこっちに？
佐久間　（悲鳴）あの人、ガソリン被って火を！あ、こっちに？え？
警官　ああ。遂に包囲網を突破されたか。
ケンジ　え？
警官　ずっとそこの包囲網の外に居た人たちですよ。
ケンジ　えっ…なにそれ？　（他全員も、窓の方を見る）
警官　ったく…（と立ち上がる時、ホイッスルが鳴って歓声。バシッとボールの音。と共に、入り口の方に走って去る）こらー
ケンジ　（ロールカーテンを上げて窓の外を走っていく警官に）どういうことですか…？！

同時に窓ガラスが割れる。石の当たる音。コズエ、倒れる。

ケンジ　コズエ、
佐久間　（コズエに駆け寄り石を拾って）石だわ、なんでこんな、
ケンジ　（コズエに駆け寄り）コズエ、しっかりしろ！
コズエ　ケンジ…、私に何かあったら…何かあったら…
ケンジ　大丈夫だ。（佐久間に）バックヤードに。（と、佐久間と共にコズエを運ぶ）
コズエ　（以降、持ち上げられたり運ばれたりの間に）私に何かあったら、コズＢが居るから。
ケンジ　え？
コズエ　コズＢにも何かあったら、コズＣが居るから、
佐久間　（驚愕）えっ、コズエさんの「エ」って、アルファベットだったの？！
ケンジ　何を言ってるんだ。

コズエ　ええ。AからZまで。
佐久間　（ハッとして）じゃあケンジさんの「ジー」も？！
ケンジ　何言ってんですか。ちゃんと持って。
佐久間　だって、
ケンジ　おい、キミ、カイ、爺ちゃん連れてこっちへ。早くしろ！

爺さんと開閉、段ボール箱を持って逃げようとするも、大きなガラスの割れる音。

開閉　あっ…！父さん？　父さん！（入り口に向かって走る）
佐久間　カイちゃん駄目、こっち来て！（開閉を追う）

開閉が外に出ると更に大きなガラスの割れる音。窓の外で開閉、割れる。
佐久間は悲鳴をあげて逃げ去る。
舞台上にキミと瀬尾だけ残る。建物を叩く音。怒声は続く。
キミはPCの映像を見ていたが、唐突に入り口に向かって歩き出す。

瀬尾　（急ぎ止めて）あ、おいどした。
キミ　施設で一緒だったトモちゃんが来てくれた。
瀬尾　あ？
キミ　（漫画単行本を見せ）これを渡さないといけない。
瀬尾　「お代官ちゃまSOS!!」を？
キミ　次はトモの番だった。
瀬尾　ああそうか。それ、あれか。施設かなんかの本だったのか。
キミ　だから（行こうとし）
瀬尾　（止めて）いや待て。この状況で今さら13巻だけ渡されても困ると思うぞ。
キミ　なんでだよ！
瀬尾　いいから奥に逃げとけ。
キミ　この巻で、お主も何だったのかが、判明するんだよ。
瀬尾　…あ？
キミ　主人公のエチゴヤが、何だったのか。
瀬尾　ワルだよ。お主もワルよのう。
キミ　（高速で瀬尾の口を塞ぎ）シッ！　トモに聞こえる。
瀬尾　（苦しみ）あ、凄い握力……
キミ　（手を離し、嬉しそうに）あんたも、読んだんだね。
瀬尾　（息をつきつつ）読んでねえよ。誰でも知ってるよ。
キミ　（驚愕し）誰もが読んだのか…！
瀬尾　読んでねえよ！　読んでなくても、
キミ　（慌てふためきだす）どうしよう、トモちゃんだけが知らない。私のせいだ。
瀬尾　いや、多分知ってるし、どうでもいいから、
キミ　（外に向かって走りだす）
瀬尾　（追って）おいっ危ないから！
キミ　（一瞬だけ立ち止まってPCを見て）あ。トモちゃんが火炎瓶を。
瀬尾　えっ
キミ　今、行くからね！（走り去って行く）
瀬尾　あ、おい！（と、叫んだ後、レジの金を素早く回収して紙袋に詰めて）おい！

音楽イン。瀬尾も走り去り、また爆音が鳴り怒声。
建物の破壊されていく音。一旦、暗転。

**店外**

明転Qで明転。
レポーターは危険な現場で被るようなヘルメットを被っている。男が二人、倒れている。暴動を起こした側らしく揃いの色の服に揃いの色のヘルメットを被っている。頭を両手で隠した状態。
野次馬（蒲田）は興味津々に現場を見ながらレポートに耳を傾ける。

レポーター　はいこちら、只今起きました暴動の現場です。店内はほぼ全焼していると思われますがご覧のように火災による煤や半壊した建物の瓦礫で内部を確認するのは難しい状況です。また店の外にも暴動の、暴徒でしょうか、人が倒れている状況です。救急や消防はまだ到着していないようです。この度の暴動の背景には深刻な雇用問題があると見られていますが、
暴徒1　（うつ伏せのまま小さく呻く）うう…
レポーター　（素早く気づいて）大丈夫ですか！（と言うと同時に暴徒を素早く思いきり蹴り転がしてマイクを向ける）暴徒の方ですか！自らの暴動によって出されたこの甚大な被害について一言お願いします。今のお気持ちを。あっ（暴徒の首を絞めながら）亡くなる前に一言どうか、
暴徒1　（何か呻く）…くっ…
レポーター　（呻きに耳を傾け）……くるみゆべし？
コズF　（同時に）あ…（窓の向こう、下から姿を見せる）
レポーター　（窓の向こうに気づき）生存者です！建物内に生存者が、
コズF　（レポーターらに気づき）助けて…
レポーター　暴徒の方ですかー
コズF　（むせて咳き込みながら）いえ津久井です。津久井、コズF。
レポーター　コズエフさん。
コズF　（足元を見回し）ケンジ…父さん…（周囲を見回し）キミ……？
レポーター　今のお気持ちは？（マイクを窓の中に向ける）
コズF　キイちゃん…（窓から乗り出し）キイちゃん、どこに行ったの…！
レポーター　一言お願いします！今のお気持ちを！（マイクを窓の中に向ける）
コズF　あっ、はい是非、（窓から出て来ようとしながら）カメラは、カメラはどこですか？　誰かキミを、キミがどこに行ったか…！
レポーター　カメラ？（周囲を見回す）
コズF　ええ、どこですか？　キミがどこに行ったか急いで、
レポーター　……どこかにあります？
蒲田　（周囲を見回しており）いや……。
レポーター　…ないようですね。
コズF　ない？
レポーター　ええ。
コズF　え、じゃあ、あなた何をしているの、
レポーター　レポートです。
コズF　でも誰に、
蒲田　あ、僕に。
コズF　あなたに。

蒲田　ええ、この暴動の甚大な被害の状況をつぶさに、
コズF　でも、見れば分かるでしょう。
蒲田　えっ…？（と驚き首を傾げる）……。（まったく分からない）
レポーター　なので私が。
コズF　あ。じゃあ、テレビやネットのニュースには…
レポーター　ああそんな（思わず笑い）私どこにも雇われてませんから。
コズF　え？
レポーター　雇用なんて誰もなかなか。
コズF　…はあ、
レポーター　で。今のお気持ちは。
コズF　え？
蒲田　（コズFに向き直る）
レポーター　（沈痛な面持ちで）先ほどの様子を見た所恐らくどなたかを探していらっしゃるようですが、
蒲田　ええっ？！
レポーター　いったいどなたを？
コズF　でも…ただの興味本位ですよね。
レポーター　はい。そんな私たちに対して今、どんなお気持ちなのか教えて下さい、
蒲田　（興味津々にコズFに近づいていく）

レポーター、質問を投げかけつつ蒲田と共にコズFを掴んで至近距離に。
同時に警官、規制線のテープを持ってやって来る。

警官　（レポーターらに）あっすいません。今、規制線貼るんで退いて下さい。
コズF　（よく見えぬまま）あっ警官さん？
レポーター　（詰め寄りつつ）さあ早く、
コズF　ちょっと。沈痛な面持ちやめて下さい！（レポーターを突き飛ばし）そんな顔、どうせ嘘なんだから、
レポーター　（突如悲痛なまま振り返る）
警官　どうしました？
レポーター　この辺にトイレは、
警官　ああ。そこに区営の無目的ホールがあって、無目的トイレがありますけど、
レポート　いえ目的は、あるんです（腹が痛い）
警官　あー。
レポーター　ああダメだ。（と腹を押さえたまま去っていく）
警官　（コズFに）嘘じゃなかったみたいですね
コズF　え？
警官　顔。
コズF　ああ（どうでも良く）それよりキミを知りませんか、急いで探して下さい、
警官　いやすいません、とりあえず（テープを見せ）これをやらないと。現場保護と被害状況の確認と（倒れている二人を見て）負傷者死傷者の対応が（と、鼻息。ホイッスル）

短いホイッスルが鳴ると、うつ伏せに倒れていた暴徒二人、勢い良く立ち上がり舞台中央の旗に向かって走り、一人が旗を取って奇声を上げガッツポーズ。これまでよく見えなかった揃いの色の服は体にぴっちりとしたタンクトップかTシャツで、頭には揃いのライフセーバーキャップ。取れなかった方は悔しがる。そしてまた旗を元に戻し無言で旗から離れて素早く再びうつ伏せの体制に。元の状態。静まる。

警官　…。（その一部始終を見ていたが）だから今ちょっと忙しいんですよ。
コズF　え…。ビーチフラッグ？
警官　え？
コズF　この方達、ビーチフラッグの。
警官　え？　ああ。そうみたいですね。（と、旗を取る。そして下手に戻っていく）
コズF　あ、警官さん、どこへ…
警官　（立ち止まって旗を見て）どこにしますかね。（と言うと、去っていく）
コズF　警官さん、ちょっと待って…！（と、建物から出て）

同時に消防車のサイレンが聞こえ始める。

コズF　（蒲田に）あっ、消防士さんに一人行方不明者が居るって伝えて、子供服を着た三十歳女性、名前は津久井キミ。お願いね！
蒲田　えっ…
コズF　警官さん、待って！（警官を追って去る）

サイレン、消防車のウーーと思いきや甲子園のウーーで、高校球児が小走りにやって来る。

蒲田　（球児に対し）あ。
球児　（建物を見て驚き）え、どうしたんですか、これ。（振り返って）今の人、必死で何か言ってましたけど、何かあったんですか。
蒲田　（何故高校球児がと思いつつ）え？
球児　（倒れている二人を見て）あっ、この人たちはどうしたんですか（駆け寄って）大丈夫ですか！
蒲田　……。
球児　（蒲田に）この方達はいったいどうしたんですか、あの方は何をあんなに、必死に訴えていたんですか。
蒲田　いや僕は何も、
球児　あなたここに居たんでしょう？一部始終を見ていたんでしょう？教えて下さい、何があったのか
蒲田　あーでも僕は何も、
球児　しっかりして下さい！　僕に出来ることあれば何でもします。
蒲田　でもあなた、高校球児でしょう？
球児　はい。でも信じて下さい。あなたが何があったのか教えてくれさえすれば、僕は力の限り、何でもします。
蒲田　……。
球児　本当です。心の底からそう思ってます。だから……（純粋な目で蒲田に迫る）
蒲田　あー…今の方はどなたかを探していて（頑張って思い出す）えー…その方は子供服を着た三十歳女性、名前は…、つくいきみ、恐らく今の方のご家族で、急いで探してあげないと何か大変な

遮ってカキーンと野球の打球音。

球児　（同時に上を見上げて）あっフライが！（フライを目で追いグローブを掲げ蒲田に）すみませんフライが、（フライを追いつつ）オーライオーライ（心から悔しく蒲田に）くそっ！すみません…！（と悔しい声を上げ。しかしフライを追って）オーラーイ！（心底心残りな表情を残しつつ、去っていく）
蒲田　……。

入れ替わりでキミ、火炎瓶を持ち、トモを探してやってくる。

蒲田　（服装などを見て）あ…（気づききってはいない）
キミ　この火炎瓶を持ってた女、見なかったか。
蒲田　は？
キミ　（漫画を見せるか叩きながら）お代官ちゃまとエチゴヤくんが、何だったのかを教えないと。
蒲田　お代官と、エチゴヤ…？
キミ　お代官ちゃまとエチゴヤくん。

救急車のサイレンが近づく。

蒲田　あ。
キミ　（火炎瓶に火をつけ掲げ、救急車に向かって）おい、そこの車。乗せろ！　おい！
蒲田　（ひいと悲鳴をあげ）あ、なにを、

救急車は遠ざかっていく。

キミ　（火炎瓶を掲げたまま）あ、なんで行っちゃうんだよ、おい！（救急車を追って舞台を降りていく）

遠くの方から小さくホイッスルが聞こえ、倒れていた二人、勢いよく立ち上がり畑を取りに走るが無く、必死の形相で右往左往。蒲田、ひいと逃げ去る。二人もフラッグを探しながら我先にと走り去っていく。そのまま映像へ。

---

**FILM　蓋CM**

「お代官ちゃまSOS!!」の表紙。その後、素敵なCMが始まる。男女タレントが何か言う度、蓋が閉まる。

男「閉まる、閉じる、閉ざす」女「蓋」
男「守る、塞ぐ、封じる」　女「蓋」
男「見えない、見せない」　女「隠す、秘める」
男「覆い隠す」　女「蓋」
男「閉じましょう」　女「閉めましょう」
男「蓋」　女「全てのものに、蓋を」

「政府広報」の文字が出るも、そこにも蓋。

---

**道中**

キッチン井上のエプロンをした、井上の息子（サトル）、スマホで電話をしながらやって来る。

キミ　あ、「キッチン井上」…（舞台上へ戻る）
サトル　ああはい。いやもうちょっと探してみます。ああ大丈夫です、とりあえず。あ、じゃもしそっちに何か連絡とかあったら。はい。どうも。（スクリーンを上げて窓の外を見る）
右足　あっちの店にも居なかったー。

首か肩からすっぽりと大きな靴下を纏い、足に大きな一つの靴を履いた、右足、やって来る。
普通に歩ける。女の子。キミは窓の向こうに隠れる。以降、窓から様子を見続ける。

サトル　マジかよもう、面倒臭えな。…ほんとに心当たりとかないの？
右足　あるわけない。気づいたら私だけ取り残されてたんだもん。
サトル　つか普通、右足とか置いて弁当の配達行く？行ける？
右足　知らないよ。あー頭とか胴とか手、どこ行っちゃったんだろう。勝手にずるくない？
サトル　知らないよ。（舞台端の箱を取って座る）
右足　（首を回して）あー疲れた。膝、ガクガク。
サトル　（ああ頭の部分が膝なんだ…と思いつつ）…つか。父さんの右足が、なんで女なわけ…？
右足　知らないよ。
サトル　くっさい出っ腹のクソ親父なのに…
右足　（笑って）ヒドいー。でも私はスリムでしょ？　すね毛だって一本も生えてないし、ほら、すべすべだよ。
（首元を見せる）
サトル　（ちょっとどきっとし）あ、そう。
右足　あーふくらはぎパンパンになっちゃった。ちょっと揉んでくんない？（サトルに擦り寄っていく）
サトル　やだよ。
右足　いいじゃん。照れないで。（更に擦り寄り）
サトル　照れてねえよ。なんでちょっといい匂いするんだよ、擦り寄るなよ、離れろよ。
右足　（笑って）かわい。
サトル　（右足から離れ）ねえ、父さん四十五歳だよ？
右足　だからなに？
サトル　つか、父さん自身は、知ってんの？
右足　なにを？
サトル　だから自分の右足が…
股間　あ、やっぱりだ！

大きなトランクスを背負い、その真ん中から上半身を出した、股間。女の子。やって来る。

右足　え。やだどこ居たの？
股間　分からんのー。気づいたらそこに転がってたー。どゆこと？
右足　分かんないの。私も気づいたら、
股間　（サトルに気づき）お、我が息子くん。何してんの？元気？
サトル　え、
右足　ねえ、股間が居たってことは、この辺に頭とか手とかも、
サトル　股間なの？　父さんの股間なの？
股間　あ、うん。よろちんこ。（可愛い顔かしぐさ）
サトル　…！
股間　ねえなんで皆んなバラバラなん？何があったん？
右足　だから分かんないんだって。
股間　やばたにえん。
右足　そこら辺探したけど、
股間　見つからんの。
右足　うん。
股間　わろたにえん。おわたにえん。
右足　でも股間居たし多分ここら辺に、
股間　分からんよそんなん。
右足　だから探そ、一緒に。

股間　やだよそんなん。
右足　（サトルに）ねえ腰が重い。どうにかして。
サトル　なんでだよ。
右足　え？
サトル　なんで父さんの股間が、
股間　（上半身をくねらせてた）なに？（サトルに凝視されているので自分の全身を見て）なんかおかしい？
サトル　だって、
股間　（自分の体を撫でたり、頭をこすったり等しながら）とりま今は良くね？　そのうち戻ってくるよ。帰ろ。
サトル　ねえ父さんは、父さん自身は知ってるの？　自分の股間が…
右足　ああもう。この辺探そうよ！
サトル　あ、母さんは知ってたの？　つか母さん出てったのって、
股間　あーそれ、私のせいじゃない。出てく前からもう十年は会ってなかったし。（歩き出す）
右足　え、帰るの？　いいの？　バラバラのままで、
股間　どうせもう元に戻らんよ。ぴえん。
右足　だってこのままじゃ腐っちゃうよ、
股間　しょうがないよ。（去っていく）
サトル　あっ、じゃあ俺の足とかも？（自分の足を掴む）
右足　えー、（追って去る）
サトル　ちょっと待って、腐る前に教えて、俺の足とか、（追って去る）

ずっとやり取りを見ていたキミ、思わず窓から走り出て、

キミ　おい！　その、頭と手と胴、あいつが持ってた。あいつ。名前なんてんだ？　おい！（追って退場）

---

**面接**

四人去るとモヤモヤとした音と照明に切り替わる。女性社員二人、一人はトモ、書類束持ちやって来る。

女　じゃあそうね。そこに一つとそっちに一つ、机と椅子をセッティングして。必要書類を置いといて。
トモ　あ…、どこですか？　どこに…
女　え？
トモ　すみません、よく見えなくて…
女　だから（準備しながらとても高い裏声になり）ここと、あとそっちに、一つずつ。
トモ　あ、すみません、よく聞こえませんでした。
女　（声戻り）ああ、幻だからねー。正社員の面接なんて。
トモ　え？
女　（準備しながら裏声で）だってそんなの。本当にあるのか、定かじゃないでしょ？
トモ　……あ、すみません、よく聞こえませんでした。
女　（声戻り）だから。正社員も面接も、全部幻だから。
トモ　…はあ。
女　（準備しながら裏声で）だからもう、&$#&;%、&%&%&だし、&%&&&ー。
トモ　え……？

中年男性社員（男1）、やって来る。照明、明るくなる。

男1　さてと。
トモ　あ、すみません。面接の準備、今、（と書類を置きに行くが）
女　（慌ててトモを引き留めて）トモちゃん、待って。
男1　（トモに）あれ？　それ、面接書類だよね。
女　（トモを連れ戻しながら）答えちゃ駄目。
男1　それ、今日の面接書類でしょ？
トモ　（連れ戻されながら）あ、はい。
女　（トモを自分の方に向き直させて）駄目だって。あれは幻、あなたの幻。
トモ　え…。
男1　（トモから書類を奪って）あんた、ここで何やってんの。
トモ　え、何って、
女　（裏声で）だから全部、幻なんだってば。あんたがここに、勤めてるのも。
男1　派遣の人？違うよね？　誰なのあんた。警備を呼ぶよ。
女　（裏声で）ね。全部幻覚なんだってば。ってば。ってば。ってば。（エコー）
トモ　……。
男1　何ぼーっとしてんの、ほら早く出てって。
トモ　あ…
男1　何。
トモ　面接はほんとにあるんですか。
男1　あんたに関係ないでしょ。
トモ　受けさせて下さい。
男1　何言ってんの。馬鹿言ってないで出てって。
トモ　じゃやっぱりないんですか。幻なんですか。
女　（裏声）そう…幻なのよ。（トモの手を取って）行きましょう、トモちゃん。（引っ張っていく）
トモ　（引っ張られながら）あ、ちょっと待って。（男1に）幻でもいいんで…（引っ張られて去る）
男1　（腕時計を見て幕内に）じゃ入って。

女たちと入れ替わりで若いスーツ男性、パッセでやって来る。と同時に、幻想的な音と照明に変わる。

男2　（バレエのパッセ）失礼します。
男1　（バレエのパッセ）はいどうも。
男2　（バレエの動きで）今日はよろしくお願いします。
男1　（バレエの動きで）こちらこそ。
男2　（同じく）御社の面接を受けることが出来るなんてまるで夢のようです。
男1　（同じく）ええ、そうです。夢なんです。
男2　（同じく）……えっ
男1　（同じく）夢なんですよ。
男2　（同じく）これは、夢…？
男1　（同じく）そうです。これは夢。
男2　そうか。僕は夢を見てるんですね。（書類を持ってバレエの動きで上手に去り、窓の外へ）
男1　ええ。現実ではありません。（美しく踊る）

トモ、戻って来る。

トモ　（窓の外を飛んでいく男2を見て）え、ここ二十八階ですよね？　あ、これも幻覚？

男1　（美しく踊るまま）いえ、これは彼の夢です。
トモ　彼の。（再度窓の外を見て、遠くの煙に気づく）あ、すごい煙。
男1　（美しく踊るまま）ああ。製油所だ。
トモ　製油所？
男1　（美しく踊るまま）ああ、製油所の石油タンクが、また燃えてるね。（踊り去っていく）
トモ　石油タンクが。

**製油所**

トモの居るままサイレンの音で、照明、火災現場に。所員1が走ってやって来る。

所員1　（無線に）三番タンクから四番タンクへ着火。じきに五番タンクへ引火です。
無線　所員集合、五番タンク前へ。所員全員、五番タンク前へ。
所員2　（やって来て）いま四番タンク、全体炎上です、炎上しました。
所員1　（無線に）四番全体炎上、急いで下さい。
無線　全員ただちに全ての持ち場から五番タンク前へ。
所員2　（トモに）あ、あんた誰だ。どこから入った。

炎の音、大きくなり、照明、揺れる。

所員1　（無線に）五番に引火します、五番に引火です！
トモ　（思わず悲鳴を上げる）

同時に、いい声の歌声が聞こえだす。

所長　鬼ーーーーーーーの、パンツはいいパンツ
所員ら　強いぞ　強いぞ（ふりつけ有り）
所長　虎の毛皮でできている
所員ら　強いぞ　強いぞ（ふりつけ有り）
所員1　（トモに）はいあんたも。
所長　（歌と振りを続け）履こう　履こう　鬼のパンツ
所員2　（歌と振りを続けてトモを促し）履こう　履こう　鬼のパンツ
所員ら　あなたも、私も、あなたも、私もーーーーーー
トモ　（共に踊りながら）なんなんですか、これ。
所員ら　みんなで履こう、鬼のパンツ（歌が終わり、歓声を上げてハイタッチするなど持ち上がる）
トモ　あの、
所長　火の神秘に畏敬の念を。仲間との絆をこの炎のように心に焼きつけろ。
所員ら　（歓声）
所長　チェッチェッコリ、（次の曲を歌い踊り出す）
所員ら　チェッコリナ、（同じく）
トモ　あの、消さなくていいんですか？
所員2　（踊りながら）消す？
所員1　（踊りながら）何故。
トモ　（踊りながら）だって…、
所員ら　（ちょうど終わる）ホンマン、チェチェ。（もう一回）チェッチェッコリ、チェッコリナ、

所長　（踊りながら）せっかくここまで燃え上がったのに。
トモ　（踊りながら）あ。…火を、つけたんですか？
所長　（踊りながら）ああもちろん。
作員員ら　（ちょうど終わる）ホンマン、チェチェ。
所長　なかなかここまで燃え広がることはないよ。凄いだろ。だからほら一緒に、火を囲もう。
所員ら　（マイムマイムを歌い踊り出す）みんなが集えば始まる宴、
トモ　（間に割って入り）いえあの！
所員ら　（歌と踊りやめ）
トモ　いいんですか、全部燃えちゃいますよ？こんなことしてる間に…
所員1　…えっ
所員2　ああ…。
所員1　残念だけどな。
所員2　仕方ないよ。
トモ　え、
所長　炎は永遠には燃えない。
所員1　だから今は束の間、
所員2　楽しもう。ね？
トモ　……ああ。
所長　（囁くように歌いかける）ともだちが出来た
所員ら　（いい声でハモり）すいかの名産地
所長　（いい声で）なかよしこよし
所員とトモ　（ハモリ）すいかの名産地

そして歌が盛り上がり始めようとする所で、消防車のサイレンがけたたましく聞こえ出す。

所長　なんだ？
所員1　誰か呼んだのか？
所員2　まさか、
所長　あんたか？
トモ　いえ、

消防車のサイレン止まり車のドア開閉音。佐久間、消防士の制服で慌てやって来る。

佐久間　大丈夫？なんかすごい燃えてるけど。
所長　消防は呼んでないよ。
佐久間　でも消さないと。（消防車を振り返り）使い方わかる？放水とかほら、あのホースでなんかやるんでしょ？
所員1　（戻ろうとする）
佐久間　（それを止めて）いいんですよ、消さなくて。
所員1　そうなの？
佐久間　あんたなんなの？消防士じゃないでしょ。
所員1　ああ佐久間です。なんか色々あって急いで逃げ出したら、丁度よくあの車があったからちょっと。
佐久間　（佐久間の服装を見て）え、
所員1　そしたら凄い煙と火が見えたから思わず。（車を運転する仕草）
佐久間　あ、勝手に乗って、来ちゃったんですか？
所員1　（火の方を見上げて）…ああ近くで見るとすごいわ。

所員２　美しいでしょう。
佐久間　ええ。これなに？
所長　石油タンクです。
佐久間　ここどこ？
所長　製油所ですよ。
佐久間　製油所？
所員２　ええ。そこの海岸にタンカーが来るんです。そこから原油を汲み上げて、ここでガソリンや灯油、軽油、重油などに、
佐久間　原油がそこに？（思わず駆け寄り）
所員１　ええ。ドバイなど主に中東の産油国から。大量の原油を積んだ大型タンカーです。
所長　（佐久間が興味津なので）よかったら見て行きますか。
佐久間　いいんですか。
所員２　この後、ベーコンとマシュマロを焼くんでよかったら一緒に。
佐久間　やだいいの？
所長　炎を囲めば皆、仲間ですから。
所員２　ほらこの一時貯蔵庫にも。（と、窓の外に身を乗り出す）
佐久間　（同じく身を乗り出し）ああ凄い。
所員２　（笑って）ええ。中東から届いたばかりです。
トモ　（同じく身を乗り出し）真っ黒。
所員１　ああ、精製前の真っ新な原油だ。
佐久間　いくらくらいなのかしら。
所員１　え？
佐久間　凄い高いんでしょ？
所員１　ああ。世界情勢とまあ、十年程前にいよいよ地球上の全ての原油が枯渇するっつう話があって。
所員２　でまあそん時、それまで以上に、もう馬鹿みたいに、高騰はしましたけどね。
所員１　そりゃもう。
佐久間　…え。前よりもっと凄く？え？どんくらいに？
所長　（笑って）でもまあ枯渇なんてそんな。馬鹿らしい。
佐久間　（所長を見る）
所長　するわけないし、しなかったんですよ。大丈夫。（窓の外を差し）この通り。ずっと変わらずに送られて来てますから。
佐久間　ああ。そうなの。よかった。（安心し再び窓の外に身を乗り出す）
所員２　でもまあ価格はなかなか下がりませんけどね。
所員１　需要の低迷やシェールガスの台頭で下がるかと思いきや、
所員２　やっぱりそうはいかないね。
佐久間　（乗り出したまま）でもこれ、お醤油じゃない・・？
所員１　え？
佐久間　（振り返って）お醤油。
所員ら　（無反応）
佐久間　だってこの匂い、ほらこの色も、（再び窓の外に身を乗り出し）
所員ら　（一斉に笑う）
所員２　何言ってるんですか。
所長　そんなわけないじゃないですか。
佐久間　でもほら！（指を舐めて）お醤油よ、これ！（指を見せて）絶対お醤油。濃口醤油。ほら！
トモ　（舐めに行ってみる）

所員1　（トモを止め）ほらそんなん舐めたら塩分過多で死ぬよ。
トモ　え、
佐久間　やっぱり！
所長　そんなわけないでしょう。私たちはこれをガソリンや灯油、軽油、重油に加工して、そこから更にプラスチック製品などが作られているわけで。
佐久間　お醤油で？
所員2　確かにあれ以来自動車は碌に走らないし飛行機もちょっとしか飛ばないし、プラスチック製品もなんかちょっとふにゃふにゃですけど、
佐久間　え、ちょっとは走るの？ちょっとは飛ぶの？
所員1　あなたも乗って来たでしょ、消防車。
佐久間　あれもお醤油で！
所長　だから原油です。ガソリンです。
佐久間　（窓の外を見て）でもだって、

強風が吹く。

トモ　あ、なんかいい匂い。
所員2　ああ、あっちの天然ガス貯蔵タンクからです。
佐久間　でもこれあれよ、ファブリーズ。（匂いを確かめる）
所員1　あっちも見学して行きますか？。
所長　どうぞこちらに（歩きながら）
佐久間　（着いて行きながら）でもファブリーズよ。あら？（足元の何かに気づき拾う）黒豆？
所長　ウランです。
佐久間　え。（と、黒豆を見てから、所長が去っていくのを追って）でも黒豆よ？（追って去っていく）
トモ　（火の方を見上げて）あ…、火が。

照明、火が消えていく。

所員1　……早いな。
所員2　（トモに）でも大丈夫。この火は皆の心の中で、燃え続けるよ。
所員2　さ、ベーコンとマシュマロを取ってこよう。
トモ　あ、はい。

レッドリバーヴァレーを、歌いながらスクリーンを下ろす三人。映像へ。

---

**FILM　食欲・二世三世**

各国の主要都市、工業地帯、農業地域の遠景映像。

声「世界各地の、主に都市、また工業地帯や農業地帯が、非常にお醤油臭くなりました。繰り返します。
各国の都市や工業地帯、また農業地域がお醤油臭くなりました。」

各国の主要都市、工業地帯、農業地域の近景映像。

声「こんがり焦げたお醤油の匂いがあちこちに漂い、これにより、世界的にちょっとお腹がすいています。
お腹をすかせた人々はその食欲を満たそうと、うっかり少し食べ過ぎています。ご注意ください。
各国の主要都市、及び工業地帯や農業地域において、少し食べ過ぎです。」

世界の議事堂。

声「また、二世三世四世五世、或いはその親類縁者たちによる各国の国政が、親戚の集まり、正月、お盆、挙式、通夜、
法事などの行事に、代わりました。その宴会における、団欒や噂話、酒の勢いやちょとした喧嘩、調子に乗った
一発芸や昔話などが、盛り上がっています。」

内容に合わせた画像、いちいち挿入される。

---

**菌**

映像中に農家の女性、やって来て映像を見ている。映像終わりで、二人目の女性が来る。

農家1　ああやだね。親戚付き合い。（スクリーンを上げる）
農家2　（やって来て）そう？
農家1　やだよ。面倒臭いもん。
農家2　まあね。
農家1　あんなんやめちゃえばいいんだよ。面倒臭がってんの、きっと沢山いるよ。
農家2　（笑）
農家1　で、そのうちなくなるよ。いつの間にかなくなる。
農家2　そうかな。
農家1　あんたはいいよ、また好かれてんでしょ？
農家2　え？
農家1　昔からそうだよ、どうせ可愛がられてんだろ？いっつもそうだよ。
農家2　そんなことないよ、私だって、
農家1　はいはい、休憩終わり。
農家2　言うけどあんたの方が好かれてたんだからね。ヤッチだってモンちゃんだって、
農家1　いつの話してんだよ。言うけど別に友達じゃなかったから。どっちか言うと嫌いだったし、
農家3　（男性。やって来て）どうした。ほら。喋ってないで仕事仕事。
農家1　いま始めるとこだよ。
農家3　喋ってたじゃないか。
農家1　だから何だよ。
農家2　ああもう喧嘩しないでよ。
農家3　（農家2に）ああごめん、喧嘩なんかしてないよ、ほら仕事だよ。はいこれ。（道具を渡す）
農家1　あらお優しいこと。
農家3　別に優しくなんかないよ。
農家1　あんたはいつもそうだよ。

そこにコズH、警官の帽子を持ってやって来る。

コズH　あ、あの、すみません。コズHと申します。警官さん、通りませんでした？
農家3　H？

コズH　旗持った警官さん。
農家1　見てないよ。
農家3　（とんかちと駒菌を持って）ほら今日中に菌打ちしないと。
農家1　はいはい。（とんかちと駒菌を持ってウロウロしだす。そして壁に菌打ち。）
農家2　急がないとねえ。（とんかちと駒菌を持つウロウロしだす。そして壁に菌打ち。）

農家三人、周辺の壁に向かって、コンコンコンコンと菌打ち。

コズH　…。あの。何をしてるんですか？
農家3　見りゃわかるだろ、菌打ちだよ。（※以降、農家たち、菌打ちしながら）
コズH　きんうち？
農家3　しいたけの菌を打ち込んでるんだよ。
コズH　この、ビルにですか？
農家3　ああ。（ビルを見上げて）ほだビルだ。
コズH　ほだビル？（ビルを見上げて壁に触る）
農家1　ちょっとやめて。乾燥させたり日に当てないようにしたり手間がかかってんだ。
コズH　え。ここのビルに、しいたけを？
農家2　ええ、毎年毎年。
農家1　欠かさずね。
農家2　ここら一帯の、ほだビルにね。
農家1　ああよく採れるよ、いいのがね。
農家2　そりゃもう沢山。
コズH　（辺りを見回し）この、オフィス街のビルに？
農家3　ああ（ビルを見上げて）ここらの高層ビルに、下から上までみっちり植えるんだよ。
コズH　（ビルを見上げて）上まで？
農家1　だから忙しいんだ。

中折れ棒を被った三揃スーツの男、ハンチングを被ったスーツにベストの男、ベレー帽を被ったドレッシーなスーツの女性、やって来る。

スーツ1　（農家らに）お疲れ様。
スーツ2　（農家らに）ご苦労様です。
農家3　そちらも休憩終わり？
スーツ3　ええ。急いで戻って仕事しないと。
農家3　相変わらず忙しそうで。
スーツ1　上司がうるさくて。
スーツ2　でも僕らはまだ楽な方ですよ、（ビルを指し）あっちの奴らなんか休憩もせずに納期に追われ〆切に追われ、
農家3　大変だね。
コズH　（スーツらに）あのっ、皆さんここで働いてるんですか？　警官さん、見ませんでしたか？　旗旗を持って、（三人に近寄る）
スーツら　（一斉に振り返る）え？
コズH　（彼らから何かが飛んできて）あ…なんか…（飛んで来たものを払うか咳き込むなど）
スーツ3　あ、ごめんなさい。
コズH　なにこれ、

農家1　胞子だよ。
コズH　え？
農家2　胞子。
農家3　ああもう、もったいない。（コズHを引き戻し）
コズH　（胞子を払いつつ）なにこれ、
農家1　彼ら、しいたけだから。
コズH　え？
スーツ1　（コズHに名刺を渡し）三菱商事のしいたけです。
スーツ2　（コズHに名刺を渡し）トヨタ自動車のしいたけです。
スーツ3　（コズHに名刺を渡し）キーエンスのしいたけです。
コズH　（名刺を読んで）しいたけ…
農家1　毎年春に収穫するんだよ。
コズH　え？
農家2　だからここらのビルから。
コズH　彼らが生えるんですか。
農家3　そうだよ、立派なしいたけだ。毎年大量に収穫するんだ。で、いくらかは干すんだ。
コズH　干す。
農家3　だから忙しいんだ。
コズH　（再度ビルを見て）じゃ、ここらで働いてるのって、
農家1　ああみんなしいたけだよ。
農家2　どのビルもみんな同じよ。
コズH　みんな…
スーツ1　じゃ、失礼。

スーツ三人、去っていく。

農家3　さあほら、時間がない。急げ。これから官公庁舎、議事堂や党本部ビル、テレビ局や制作会社、出版社や美術館なんかにも菌打ちしてかなきゃならないんだ。
コズH　え、そこからも生えるんですか？
農家1　ああ。沢山生えるよ。そりゃもう立派なのが。
コズH　え、そしたら、役人、議員、業界人、作家や画家なんかもみんな？
農家2　ええ、しいたけよ。
コズH　そんな、
農家1　あ、（コズFの持っている帽子を差して）それもしいたけだよ。
コズH　え？（帽子を見る）
農家3　ああそうだ、警察署にも菌打ちしないと。
コズH　（帽子をひっくり返すとしいたけのヒダがみっちり）ひいっ…！
農家2　とりあえず下の方から順に、全部回って行きましょ。
農家3　ああそうだな、それがいい。ありがとう。
コズH　じゃあ、警官さんも…？
農家1　まあ仲のよろしいこと。
農家3　別に仲良くしてないぞ。
コズH　あの警官さんもなの？
農家1　あんたたち昔から仲良かったもんね。
農家2　また始まった。

コズH　え、いつから？　え、最初から？
農家1　しょうがないよ、子供の頃からいっつも一緒で、
農家3　菌打ちの度にこれじゃやんなるよ。
農家1　嫌になるのは私よ！
農家2　ねえ私は別に、
コズH　あの警官さん、石突きなの？しいたけの、石突きなの？
農家3　いちいち嫉妬すんなよ、
農家1　馬鹿だね、誰もあんたなんかに嫉妬なんかしないよ！（歩き出す）
農家2　ねえほんとに私たち何も、（追って歩き出す）
農家1　（歩きながら）私はあっちから回るから、お二人はご一緒にそっちからどうぞ（振り返りコズHに）あ、警官は知らないけど、ヤクザっぽい男とピチピチの子供服を着た女なら、さっき、そこを通りかかったよ。じゃね。（去っていく）
コズH　え、
農家2　一緒に回りましょ、私たちで一緒に回りましょ、（追って去る）
農家1　（声のみ）着いて来ないで！うざいんだよ！
農家3　何言ってんだ、二人だけじゃ手が回らないんだからしょうがないじゃないか！（追って去る）
コズH　ちょっと待って！（追って去る）

皆、去ると、照明、室内に。

**蓋**

先ほどのスーツ2と3はティーカップを持って、スーツ1はブランデーグラスを持って、やって来る。

スーツ2　また仕事中に酒なんか。
スーツ1　こんなものは酒の内に入らない（窓の外を見て）お。さっきの石油タンク、鎮火したみたいだね
スーツ3　ねえ私にもちょうだい。飲まなきゃやってられないわ。
スーツ1　（窓の外を見ながら）この忙しい時になんだって集められたんだ。
スーツ2　どうせくだらないミーティングだろ。ちゃっちゃと終わらせてそれぞれ戻ろう。

照明が揺れる。

スーツ1　ん？
スーツ2　なんだ？
スーツ3　ああまたあれよ。電力不足よ。

青つなぎを着て、手に工具箱を持ち、頭に黒い煙突を乗せたおじさん（期間工）、煙突から煙をしゅうしゅうと出しながらやって来る。

期間工　しゅうしゅう……。（無言で周囲を見回し壁を叩いて工具箱を開けるなど）
スーツ1　（煙突を見て）…あ、あの。
期間工　（痰が絡んで、痰を吐く）
スーツ2　何をしてるんですか。
期間工　ああ、またこいらの電圧が下がってるから、それに合わせて照明や空調なんかのあれを直さないと（また痰が絡む）

スーツ3　あ、すみません。ここで痰はちょっと、
スーツ2　（やはり煙突を見て）どなたですか？
期間工　ああ、トーマス。
スーツ1　トーマス。
期間工　期間工トーマスだ。
スーツ2　期間工。

方々から汽笛の音が聞こえる。近くで遠くで鳴り響く。全員、窓の外を見る。

期間工　ああ、いま他の階やそっちのビルでもエドワード、ヘンリー、ゴードン、ジェームス、パーシーなんかがね。
スーツ3　（やはりあの機関車たちの名だとか思いつつ）はあ、

右足のズボンの膝から下を剥ぎ取って、膝にリボン、可愛い靴下、右だけ可愛い女物の靴を履いたサトル、紙袋を持って、息を切らし気味にやって来る。

サトル　ごめんなさい、お待たせしました。お弁当、お持ちしました。
スーツ1　え？　誰か頼んだ？
スーツ2　ううん、
サトル　（右膝を優しく撫で）疲れた？大丈夫？（スーツらに）あれ？こちらじゃないですか？（そして膝に優しくキスをする）あとで休も。
スーツ2　（足を見ている）
サトル　（視線に気づき）あ、やめて下さい見ないで下さい（と右足を隠すと期間工に）あ、お弁当です。
期間工　（気づいて作業やめ）遅いよもう。夕方になるよ？（痰を吐く）
サトル　すみませんでした。（と、紙袋から片手用スコップを出し）
期間工　まったく。（サトルの方へ）
サトル　（紙袋の中の石炭を期間工の口に勢いよく放り込んでいく。期間工の片腕を引っ張ると期間工の口が開く。そこに石炭を次々と放り込んで行く）
期間工　（次々と放り込まれる）
スーツ1　あ、あの。期間、工の、方なんですよね。
期間工　ポー！（汽笛）しゅしゅしゅしゅ、（発車）
スーツ2　あれ？どこへ？
スーツ3　もう直ったんですか？色々、
サトル　毎度どうもー。（そして片付けを始める）

期間工が部屋から去り機関車音が聞こえなくなると、照明が変わる。
渋いジャジーな音楽が小さく聞こえ始め、同じく三揃いやベストを着込んだスーツに中折れ帽の男と帽子にドレッシーなスーツの女一人、やって来る。しかし1〜3と違ってシャキッとしておらず、ヨレてとても癖のある男女。年齢も彼らより上。

スーツ4　（男性。笑って）…優雅にお茶なんか飲んで。お。あんたはアルコールときたか。
スーツ5　（女性。同じく）いいご身分だこと。
スーツ2　ちょっと。ここはジャパンキャップホールディングスの本社ビルだよ？
スーツ1　どこから入ったんだ。これからミーティングが始まるから、
スーツ4・5　（吹き出す。そして口々に「ミーティング…」など）
スーツ3　ちょっとなに？　早く出てって。警備を呼ぶわよ。

スーツ4・5　（堪えきれずに大笑いして）警備を…！（言葉も出ない）

もう一人、同じような服装の帽子の男、小さなザルを持ってやって来る。

スーツ6　あーあんた達ね。今日から天日干しだから。
スーツ1　え？
スーツ5　旨味が増すよ。
スーツ6　いい出汁出るよ。
スーツ1　いやでも俺たちは…
スーツ4　悪いね。決まったことなんだよ。毎年必ずね、一定数は。
スーツ2　でも、
スーツ5　じゃないと腐るでしょ。
スーツ3　…え？
スーツ6　いつまでもフレッシュじゃ、いられないんだよ。
スーツ4　だからみんなね、干すんだよ。天日に。
スーツ1～3　……。
スーツ5　さ。最後のお茶だ。よく味わいな。
スーツ3　あ…。
スーツ6　水分はもう二度と取れないよ。
スーツ4　……戻っちゃうからね。
スーツ2　（お茶を見る）
スーツ6　（スーツ2に）あーあ、酒にしときゃ良かったなあ。
スーツ5　（スーツ1に）少し分けたげな。最後に一口。
スーツ4　（スーツ6のザルをスーツ3に渡し）さあ行った行った。ビタミンD2増やして来い
スーツ6　カリウムもな。（三人を押しやっていく）
スーツ1　（押しやられつつ）じゃ、結局みんな、干されるんですか？　みんな干されて、
スーツ4　じゃなかったらフレッシュなうちに食われるだけだよ。
スーツ2　そんな、
スーツ5　ほら日の出てる内に早く行きな。
スーツ3　（小さなザルを見て）あ、でもこれでどうやって、

三人、押しやられ抗議しつつも出ていく。その後、スーツ4～6、笑い煙草に火をつける等。

サトル　（片付け終わってスーツらの様子を見ていたが）……あの。
スーツ5　（サトルを見ず）なに？
サトル　こちらでその、弁当の入れ物なんかも、作ってますよね？
スーツ6　ああ入れ物というか何というか。
サトル　その入れ物のことでちょっと、
スーツ4　なんだ（サトルに）クレームか？
サトル　いえあの。ご報告というか何というか、その、
スーツ5　なに？早く言いなさいよ。
サトル　いえあの、最近ですね。漏れちゃうんですよ。パックの底？が、ちょっと弱いようで、
スーツ6　ああ。
サトル　前なんか全部こぼれちゃって、何も残ってなかったことなんかもあって、
スーツ4　（軽く吹き出して）ああ、底はね、うちじゃ作ってないんだ。

スーツ５　ええ。ここじゃ底はね。
サトル　え？
スーツ６　ここで作っているのは、蓋だけだ。
サトル　蓋だけ？
スーツ４　ああ。蓋は頑丈だろう？
サトル　あ、そうですね、はい。ぜんぜん開かないくらい…
スーツ４　ああ。絶対にこぼれない、最高品質の蓋だよ。
サトル　そうですね、
スーツ５　日本のあらゆる企業が傘下にあって、それを統括しているのがこの、ジャパンキャップホールディングス。ライオン、花王、住友化学。ダイキン、リンナイ、東芝、富士通。パナソニックに日立にソニー。トヨタもホンダも日産も。みんなここの傘下。それはご存じでしょ？
スーツ６　ああ。その全ての企業で、今は蓋だけを作っているから。
サトル　（少し考えてから）蓋だけを？
スーツ４　ああ。弁当容器に鍋、瓶、やかん。ペットボトルに化粧品。炊飯器も洗濯機も風呂も、その蓋だけをね。あとカメラのレンズキャップも、車の給油キャップも、全てはうちが、
サトル　（遮って）あ、蓋じゃないとこは…？
スーツ４　ん？
サトル　蓋以外の部分は…
スーツ４　ああ、全部輸入に頼っているよ。だから駄目なんだ。壊れやすい。（馬鹿にしたように笑う）
サトル　自動車も、…給油キャップだけ？
スーツ５　ええ、それだけメイドインジャパン。
スーツ６　あとは駄目だね。
サトル　え、いつから？　え、なんで蓋だけ？
スーツ４　ああ何やかんやあって、今や日本に残されたのは唯一、蓋づくりの技術のみだ。
サトル　そ（うなんですか？）
スーツ４　（続けて）他は何も作れない。
サトル　何があったんですか？
スーツ４　知らないよ。
スーツ５　だから蓋以外のことはちょっとね。
サトル　あ、あの、しいたけじゃない方は居ないんですか、
スーツ６　え？
サトル　干ししいたけじゃない方はもう、

同時に照明、ゴージャスに切り替わる。スーツら、ハッとする。

スーツ４　（サトルに）離れろ。
スーツ５　（同じく）下がって。
スーツ６　（同じく）早く！

同時にひときわ大きな帽子を被り首にリボンを巻き、煌びやかながらしいたけっぽい衣装を纏った女、緑の葉を背にして、或いは桐箱のようなものに囲まれて、ゆっくりやって来る。

スーツ４　どうされました？
スーツ５　石川県の奥能登からわざわざ？
ＣＥＯ　ＣＥＯとしてたまには様子を。

サトル　ＣＥＯもしいたけですか、（思わずＣＥＯに近づき）
スーツ６　下がれ！
スーツ４　誰より由緒正しい血統の方だ。
サトル　菌の？
スーツ５　ええ最上級の菌よ。
サトル　でも菌…
スーツ６　ああだからこそ血統が大事なんだ。
スーツ４　血統だけが物を言うんだよ。
サトル　はあ、
ＣＥＯ　まあ良い。離してあげなさい。
スーツ６　でも…
ＣＥＯ　（華麗に舞う。キラキラとした音）
サトル　あ…いい匂い……
ＣＥＯ　（華麗に舞う。キラキラとした音）
サトル　ああ…松茸より凄い…
スーツら　（平伏す）
スーツ４　分かったか。この方こそ日本の頂点に立つ最上級の菌だ。
サトル　香りが深い……（平伏す）

キラキラと胞子が舞うなか、キミ、漫画を掲げて叫びつつ走り込んでくる。

キミ　トモちゃん！ここにトモちゃん居なかったか！
スーツ５　なにあんた、
キミ　トモちゃんだ！居なかったか！
スーツ６　（ＣＥＯを守り）なんなんだ、
キミ　さっきここに入っってったから！　だから順番に上がってきた！
スーツ４　出てけ！（警報を押す。警報が鳴る）警備は何をしてる！
スーツ５　（窓の下を除いて）あっ、なんか、ボールのようなものがゴロゴロと…

聡史は必死で右足を守っている。スーツ５「ひい…」と窓のロールカーテン下ろす。照明、揺れる。

スーツ４　あっ、また電圧が…。

暗転。同時に警報も消える。

キミ　トモちゃん、13巻！

音楽イン。

**FILM　5年後・所属**

「お代官様ＳＯＳ!!」13巻。著者近影、木戸マッチョ先生。
漫画本と著者近影の、イメージ映像。
切り替わり、大正時代風に着物に帽子を被った女のイメージ映像で、

声　「充分な日光と、高級な枯れ草、こだわりの枯れ木で、おもてなし致します。」
（料亭に、日光と枯れ草と枯れ木が、高級そうに並ぶ様子）
文字「銀座菌兆」（しいたけの描かれたロゴ）

華やかな音楽。帽子を被ったシェフ、或いは帽子を被った客らのイメージ映像。

声　「新鮮な日光と、色とりどりの枯れ草枯れ木。豪華な昆虫に動物の死骸。
ビュッフェスタイルで、有機物、分解し放題」
（洋風レストランに、日光と大量の枯れ木枯れ草、昆虫と動物の死骸）
文字「ホテル菌オータニ」（しいたけの描かれたロゴ）

帽子を被った、スーツの女。

女「銀座菌兆、及びホテル菌オータニでは、パート・アルバイト従業員、募集中です。
菌でなくてもＯＫ。時給は枯れ葉三枚です。」（枯れ葉三枚）

帽子を被った男女のアナウンサー。洒落た背景と音楽と共に。

男「ニュースです。24年間に渡る立てこもりの末、暴徒に襲われた中野区のコンビニですが、
あれから五年が経過した今、そこに急行したはずの救急車が、マニラで発見されました。」

マニラの映像。荒れ果てた救急車。

女「警視庁は何者かが海外逃亡に使用したものと見ています。」
男「見ているだけです。」

見ているだけの警察の映像。（帽子を被った刑事たち）

女「次のニュースです。一部の大手企業を除くあらゆる企業が全て廃業した今、
一般社会人が正規に所属出来る先は、コーラスグループのみとなりました。」

コーラスグループの映像。

男「その結果、ほぼ全国民がグループに属し、美しいハーモニーを奏でています。」
女「彼らはより美しいハーモニーを奏でるべく、毎日欠かさず集まり、練習に勤しんでいます。」

満員電車から楽しいコーラスが聞こえる。出勤する人々からも美しいハミングが聞こえる。
そして映像、急に途切れる。

**中小**

社員１　（背広の男）あれ？（映像が途切れ照明が不安定なのを見て）
社員２　（ＯＬスーツの女）ああまた電圧不足ですね。

帽子を被っていない、いわゆる普通のサラリーマンとOL、入って来る。

社員1　（スクリーンを上げながら）あ、あれどうだった？
社員2　あー読みましたけど。
社員1　どうだった？
社員2　私はいまいち。
社員1　うそ。じゃ、あれは？
社員2　あー見ましたけど。
社員1　最後まで？
社員2　はい。
社員1　どうだった？
社員2　私はあんまり。
社員1　うそ。なんで。
社員2　なんか感情移入出来ないっつうか。
社員1　そう？
社員2　だって登場人物全部しいたけじゃないですか。
社員1　うん。
社員2　作家も監督もみんなしいたけじゃないですか。
社員1　うん。
社員2　だから。
社員1　え？うそ。それで駄目なの？　したら全部駄目じゃん。
社員2　あーはい。
社員1　そんなのおかしいよ。駄目だよ。
社員2　でも、
社員1　他の貸すから。また絶対読んで。見て。ね。絶対面白いから。
社員2　いいですよもう。
社員1　駄目だよ文化作品に触れないと。どれも凄い賞取ってんだよ。芸術だよ。
社員2　でも、審査員もみんなしいたけですよね。
社員1　そうだよ。
社員2　…。
社員1　だから何。

ここまでの間に、喋るながらそれぞれ舞台上の箱を取って来て座る。背広の中年男（社長）来る。

社長　なんだ。発声練習は終わったのか。
社員1　あ、はい。やりました。
社長　嘘だろ。
社員1　はい。
社長　駄目だよ。そういう日々の積み重ねがさ、結果に繋がるんだから。
社員2　結果って何ですか。
社長　ハーモニーだよ。
社員1　でも社長、
社長　リーダー。（そして発声練習）
社員1　でもリーダー。俺たちそもそも苦手なんですよ。
社長　しょうがないだろう。仕事はもうないんだ。（そして発声練習）

社員1　だからってなんでハモらなきゃいけないんですか。
社長　なんでって。楽しいだろう。みんなで調和するんだ。したくないのか。あ？
社員1　したくなくはないんですけど、
社員2　私なんて一回も仕事したことないんですよ。こんな小さくても広告代理店に入れて、やりたいこといっぱいあったのに、なのにハモってばっかりで、
社長　しょうがないだろう。広告する物がもう何もないんだ。
社員2　蓋は、
社長　（笑って）大手専売だろ。
社員2　…。
社長　だからもうないんだよ。諦めてハモろう。な。いいもんだぞ。（社員2に近づき）互いの気持ちがな、こう、重なり合ってな。うん。折り重なって、うつろうんだよ。ゆらゆらとな。
社員2　（離れて）あーはい。
社長　いやなのか。
社員2　（近づいて）あーいえ。
社長　アカペラ、ゴスペル、ムード歌謡。色々あるが、ここをやめたってどうせどこも同じだ。給料の代わりにこうして心を満たすしかないだろ。ん？
社員1　（社長を止めるために）あーそういや津久井先輩。どうなったんですかね。
社長　あ？
社員1　ほら独立するってここ辞めた、津久井先輩。どうなったんでしょう。少しは成功しましたかね。
社長　知らないよ、辞めた奴のことなんか（舌打ちするように社員2から離れ）
社員1　ここにしちゃちょいちょいヒットを飛ばす有能な人だったじゃないですか。
社長　あいつは辞めたんじゃないよ。俺が辞めさせたんだよ。
社員1　（笑って）嘘ですよ。こんなとこで燻ってていい人じゃなかったですもん。安月給だし。
社長　（憤慨）調和を乱す奴はいらん。
社員1　調和したってぜんぜん心が満たされませんよ。今も、安月給ですよ。
社長　…。

同時に照明が揺れ、激しい雨の音。ミシミシと不穏な音がする。雷の音が聞こえ出す。

社員1　なんだ？
社長　（動じず）また電圧だろ。
社員1　でも、
社員2　空調ですかね。
社長　ああ。この自社ビルも大分古いし修繕してないから、そろそろ駄目かもな。
社員2　え？
社長　耐用年数はとっくに超えてるし、老朽化による立退き命令も出てるし。
社員1　え、そうなんですか？（窓の壁を見にいく）
社長　でもこう借金まみれのままじゃ、移転も何も出来ないし。
社員1　え？ここ借金まみれなんですか？（と、外の壁を見ようとしたのか、身を乗り出す）

そこに突然の落雷。照明光り、社員1、落雷を受けて倒れる。

社員2　え？　ちょっと先輩！大丈夫ですか、（社員1に駆け寄り）
社長　（動じず）しょうがないんだよ。借金ばかり嵩んでいくんだよ。
社員2　社長、落雷が…！（窓の外を見る）

配達員　郵便でーす。（と、窓の外から少し身を乗り出し封筒を投げ入れてすぐ去る）
社長　金ばかりかかるんだよ。
社員２　（封筒を見て）何これ、凄い電気料金…
社長　（社員２に）な。
社員２　…。え？（社員１を見て）これ？　え？（上を見て）今の分？　え？　なんで？
社長　（上を見上げて）請求ばかりが来るんだよ。
社員２　（封筒の裏表を見ながら）どこから請求が、

雨の音が更に激しくなり、照明揺れる。豪雨。

社員２　…ああ水が、壁から水が、あ、床からも、噴き出してます、
配達員　郵便でーす。（と、窓の外から封筒を差し出してすぐ去る）
社員２　（それを奪い取って）ああっ、凄い水道料金…！　水道？
社長　（上を見上げて）ああ、とても払えないよ…。
社員２　（上を見上げて）え、誰が請求を？　どこから？

そこに唐突に火山の噴火する音。

社員２　噴火？！（窓の外を見て）ああっ社長、火山が…火山がそこに。
社長　身を低くしろ。
社員２　（苦しくなって）あ、なんか苦しい。
配達員　郵便でーす。（と、窓の外から封筒を差し出す）
社長　（封筒を受け取りながら）火山ガスだ。
社員２　ガス料金も？！
社長　ああとてもじゃないけど払えない……。
社員２　（身を低くして）え？　でもそんなの。払わなくていいんじゃないですか？だって、（上を見上げて）誰が請求してるんですか。どこから来てるんですかそれ。こんなに払えるわけないじゃないですか。
社長　（口に人差し指を当て）しーっ…！
社員２　おかしいですよ、こんなの。だって、
社長　しーっ…。
社員２　でも、

外の音、静まり、照明、変わる。

配達員　…。（窓の外から静かに封筒を差し出して去る）
社員２　…。（それを受け取り、中を見る）…通話料？（そして社長を見る）
社長　…。（自分と社員２の口を交互に指差す）
社員２　え。でもこんなに……？
社長　しーっ……。（「これまでの会話、全部の通話料だよ」と非常に小声で言うかジェスチャー）
社員２　こんなに払えるわけないじゃない（ですか）
社長　（遮って）しーっ…。（とにかくもう喋っちゃ駄目だと、ジェスチャーで伝える）
社員２　……。
社長　……。（少しの間の後、社員２の頭にキスをする）
社員２　！？
社長　（しーっ）（そしてまたキス）

社員2　（少し逃げる）
社長　（それを捕まえて迫る）
社員2　…！

そうして社長が社員2を襲っていると、窓の外をサトルがやって来る。

社員2　（窓の外に）あ、助けて…！

サトル、上手から紙袋を持ってやって来るが、上半身は変わらずエプロンもしているが、下半身だけ、過剰にエロティックな女性。ガーターベルトなど。歩き方もセクシー。

サトル　はーい。キッチン井上。
社員2　えっ井上さん…、
サトル　（下半身のみ、とてもエロティックなポーズで）ランチです。

エロティックな音楽、小さく始まる。

社長　（思わずサトルの元に走り小声で）喋らないで…！（そしてその足に縋り付く）
サトル　え、ちょっと。あ…（思わずエロティックな声を漏らす）
社員1　（気を失っていただけのようで、気づきうめき声と共に体を起こす）
社員2　（驚き思わず社員1の元に駆け寄り）大丈夫ですか？
社員1　（状況を把握出来ず）え、なにが…
社員2　（思わず社員1を背後から抱きしめ）喋らないで！
社員1　え？

エロティックな音楽、徐々に盛り上がっていく。

社員2　なんで私が何の興味もない本や映画を律儀に借り続けてたか、分かりません？
社員1　…え？
サトル　ランチは、
社長　しーっ…！（サトルの足を愛撫するなど）
サトル　ああ…
社員1　（それを見て）え、何してんの？
社員2　しーっ…。
社長　（足を愛撫するなどしながら社員1に囁く）もう喋っちゃ駄目だ。体で感じ合おう…。もうそれしか…
社員2　（社員2に囁く）…調和しましょう。
社員1　は？
社員2　行こう。

社員2、社員1を立たせ、連れていく。

社員1　え、なんなの？ちょっと、（連れ去られる）
社長　……。（サトルに、奥の部屋に行こうという目配せ。表情）
サトル　……。（合意の目配せ。表情）

社長とサトル、共に下手に去っていく。

## パーティー

音楽そのまま、シーン「店外」の蒲田、招待状を持ち上手から来る。

蒲田　すいませーん、隣の者ですけどー。…。すいませーん。多分なんかこれ間違いですよね。招待状？　今、郵便届いたんですけど。

1920年代アメリカ風パーティー衣装の女二人、下手からやって来る。二人とも帽子を被っている。

女1　招待状？何それ知らない。
女2　そんなの誰も貰ってないから。
女1　ちょっと見せて。（招待状を奪う）
トモ　駄目よ返したげて。（招待状を奪って放り投げる）
女1　あんた何者？
蒲田　（招待状を拾いつつ）え？あ、僕はただの野次馬で、たまにここを覗いてただけで。
女2　（笑って）えーいやらしい。
蒲田　いや別にいやらしいあれじゃなくて、僕はただの野次馬なんで、
女1　変態。
女2　助平。
蒲田　違いますって。

ここから女2、喋り続けながら、箱を最初のシーンと同じく並べ始める。

女1　ここの隣ってそっちの小さな家？
蒲田　あ、いえそっちの、
女2　もっと小さい方。
女1　住めるの？あそこ。
蒲田　住めてますけど。
女1　すごいー。
蒲田　っていうか。ここは何なんですか。どうしたんですか。
女2　うん、改築工事がこないだ終わって。
蒲田　それは知ってますけど、
女1　五年かけて建物全部改装だもん、そりゃあね。凄いゴージャス。
トモ　建物全部で遊べるんだから。
女1　大広間が三つにプールにジャグジー、客間はいくつあるんだろう。
女2　（箱をコンビニのレジ状状態に重ねて並べ終わる）
蒲田　なのに一階はまたコンビニなんですか。
女1　そ。毎日がパーリー。パーリーヤマザキ。
蒲田　店員さんは？
女2　（手を上げて）はい。（棚からパンを取り）このパンたったの3円。
蒲田　3円？
女1　まあ勝手に持ってってもいいんだよ。
女2　もう連日連夜、パーリーだからね。
女1　そりゃもうみんな寄って来るよ。
蒲田　え、誰でも入れるんですか。
女2　うん。でも、あんただけだね。…カサがないのは。（自分の帽子を触る）

音楽、終わる。

女1　うん。…なのに、なんで招待状…？（自分の帽子を触って、蒲田を怪訝に見る）
蒲田　…あ、はい。だから何かの間違いかと、

別の音楽、始まる。

女1　あ、ほらパーティだよ！

女らステップ。シルクハットにタキシードの瀬尾、ステップを踏みながらやって来る。

瀬尾　（踊りながら）お。あんた、隣の？
蒲田　あ、そうなんです。（招待状を見せて）何かの間違いで僕に、
瀬尾　（蒲田を踊らせながら）間違いじゃないよ。あの人は何故かあんたに招待状を。
蒲田　（踊らされながら）あの人？
瀬尾　（続けて）ああこのパーティの主催者だ。
蒲田　（同じく）主催者。
瀬尾　この建物の所有者だ。
蒲田　所有者。
瀬尾　つまり誰より裕福で気高い…

衝撃音。照明と建物、揺れる。そのすぐ後に帽子を被った前出のＣＥＯと、タキシードか飛行機服の帽子を被った紳士、窓の外にやって来る。

ＣＥＯ　このパーティの主催者はどこぞのスパイか殺し屋か。
紳士　どこぞのギャングやマフィアのドンだとか。

ラプソディインブルー、流れ始める。

蒲田　なんですか今の。
紳士　ああ自家用ジェットがまたそこに。（この建物の上を指差す）
ＣＥＯ　（蒲田を見て）下賤の者が何故ここに？
女2　招待状を持ってるの。
蒲田　いやただの野次馬です。
瀬尾　（ＣＥＯに）いったい何回壊すんだ。
ＣＥＯ　（笑って）来る度にぶつかってごめんなさい。
紳士　（蒲田に）この方はかのＣＥＯだ。奥能登から来た。
ＣＥＯ　建物は大丈夫かしら。崩れてしまわないかしら。
瀬尾　（笑って）そんなの。また数時間後には直ってるよ。あの人にはあんたらなんか足元に及ばない金と権力があるんだ。
ＣＥＯ　（舌打ち）
女1　ねえ、それって実際、誰なの。（瀬尾にまとわりつく）
瀬尾　さあパーティーを続けよう。それがあの人の望みだ。
女1　だからあの人って誰なの。（瀬尾にまとわりつく）

ＣＥＯ　だからなんのパーティーなのよ、これ。
紳士　（ＣＥＯに）いいから楽しんで下さい。（瀬尾に）花火を上げろ。
ＣＥＯ　（蒲田に）ほら野次馬は早く出て行って。
女２　出ていかなくていいの。
紳士　早く花火を上げるんだ！（と周囲に向かって叫びながら去る）

音楽、盛り上がっていく。

女２　だって私が呼んだんだから。（と、箱の上に乗るなど。目線で瀬尾を呼ぶ）

照明、女２にスポット。瀬尾が手を貸し、女２、ドレスをストンと脱ぎ去る。
その下にはツンツルテンの子供服か、前出のピチピチ子供服。

蒲田　……え？
女２　（改め、今後キミ）ようこそ。お隣さん。
蒲田　…え、あんたは？
キミ　津久井キミ。

音楽、盛り上がり、花火が上がる。女１とＣＥＯ、騒然とする。

蒲田　あ…（子供服を見て、思い出し）…あの時の？　あの、なんか、行方不明だった、
キミ　（ウインク）
蒲田　え、でも。
キミ　しーっ。（蒲田だけに）何も言っちゃ駄目。あんたはただ見てればいい。野次馬でしょう。
蒲田　あ、はい。
ＣＥＯ　（キミに）あなた何なの？　どちらの胞子からお生まれかしら？　どちらの菌から（お育ちに）
瀬尾　（遮ってＣＥＯに）さあ踊りましょう。

音楽は続き、瀬尾はＣＥＯと女２を促し、踊り始める。

キミ　（棚から何か取って蒲田に投げつけつつ）とりあえず、はいこれ。欲しいでしょ。これも。これも。あとこれも。さ、そこのレンジでチンして。そこのポットのお湯も使って。新聞も雑誌も沢山あるよ。好きなの読んで。
蒲田　あ、あの、
キミ　大丈夫。どれを選んでいいよ。
蒲田　あー、
キミ　開いててよかったでしょ？　あなたのすぐそばでしょ？　ほっともっとでしょ？　いい気分でしょ？
蒲田　ああ、
キミ　（蒲田を押さえつけて）あるといいなが、あるでしょ？
蒲田　（その握力に）あ…！

瀬尾、ＣＥＯと女１を組んで踊らせ、キミらに近づく。

瀬尾　何でも選べばいい。
蒲田　（押さえつけられつつ）でも…、
瀬尾　キミはその握力で色々と握りつぶしてきたからね。だからこのくらいのことは。

蒲田　（キミの力が緩んで）握りつぶしてきた？
瀬尾　ああ。各国要人のあらゆる悪事の証拠や、あと、いろんな不都合な真実をね。
蒲田　は。（理解出来ていなくて良い）
キミ　うん。マニラ、バンコク、カイロ、ナイロビ。ベルリン、ロンドン、モスクワ、ワシントン。ほか色々と回ったよ。色々握りつぶした。
瀬尾　そうでもしなきゃ、とてもこんな。
キミ　ああ。お陰でやっと、コンビニが出来た。
瀬尾　いずれ全国展開していくよ。どこの街にもだ。
キミ　ああ。二十四時間開いてるよ。トイレも貸すよ。
瀬尾　まずはトイレにするか？ん？（蒲田をトイレに連れて行こうとする）
蒲田　ん…？（様子が変わる）

同時にＣＥＯと女２の様子も変わる。音楽、消える。

蒲田　（唐突に）あ。じゃ、肉まんを。
ＣＥＯ　（同じく）私にも。
女１　（同じく）あ、私も。
キミ　また肉まんか。
瀬尾　いつも肉まんだな。
蒲田　だってなんか…（匂いを嗅ぐ）
女１　（匂いを嗅ぎ窓の外を見て）あ、何か垂れてきてる。
ＣＥＯ　ああ悪いわね。またうちの自家用ジェットから燃料が。
キミ　酢醤油だよ。
ＣＥＯ　？
蒲田　（その匂いから）あ。シュウマイか、餃子でもいいです。
女１　（その匂いから）いや、ところてんでも。
キミ　とりあえず肉まんあっためるから待ってね。（と、下手奥に）
女１　あ、ところてん。（と、キミを追う）
ＣＥＯ　（女１を押し退け）いやまず肉まんでしょ。肉まんを先に。（と、キミを追い）
蒲田　あ、でも肉まんって、しいたけ結構入ってません？いいんですか？（と、ＣＥＯを追い）

皆、バックヤードの方に去っていく。瀬尾だけ残る。

---

**目的**

コズＮ、三角巾を被りビニール手袋をしてモップを持ってやって来る。脱ぎ捨てられたキミの服を見る。

コズＮ　あ。これはどうされました？（服を拾い上げる）奥様のお洋服？
瀬尾　あれは俺の嫁じゃない。何度言えばわかるんだ。
コズＮ　片付けておきますね。
瀬尾　津久井さん。俺は仕方ないにしても、何故気づかない。
コズＮ　え？
瀬尾　いいかげん気づいてあげて下さいよ。何のためにあいつがあんたをここに、
コズＮ　ああ、お陰でやっと働き口が見つかって。ほんとに有難うございます。
瀬尾　いや、

コズN　朝も昼も夜も夜中も、大丈夫ですから。私、働けますから。
瀬尾　いやあの、
コズN　前もここのコンビニで、やってたんです。週七日。二十四時間、フルタイム。
瀬尾　（凄いなと思う）
コズN　だから全然平気です。（平気ではなさそう）
瀬尾　いや…。あいつがあんたをここに呼んだのは、
コズN　（瀬尾を見たまま）あ。酢醤油？
瀬尾　いや、なのにあんたが気づかないから、
コズN　（匂いを嗅いで）酢醤油に、ラー油に芥子も？
瀬尾　だから、
コズN　（窓の外を見て）あーまた掃除が大変だ。
瀬尾　津久井さん、
コズN　（唐突に瀬尾にすがって）でもまた朝までにはすっかりきれいにしますから！
瀬尾　あの、
コズN　だって私一人で娘を探さないといけないんです。でもそんな費用が続かなくて、自分の生活費もままならなくて…。もうあれから五年になるんです…！　でも、ここのお陰でようやく、探し始められそうなんです。
瀬尾　だから、
コズN　あの、落ち着いて下さい。その件なんですけど、
瀬尾　（唐突に冷めて）だからあとのことは任せて、もうお休み下さい。
コズN　え？
瀬尾　深夜のシフトは、私一人で充分ですから。
コズN　いやでも、
瀬尾　いいから。一人にして下さい…（密かに欲情しだす）
コズN　は…
瀬尾　一人にして下さい！
コズN　あ、はい…。
瀬尾　じゃ。私、傘立てをアレしてきますから。（モップと服を持ち、出入り口へ）
コズN　あの、
瀬尾　なんですか！
コズN　いえ…
瀬尾　さ。お休みになって下さい。さ。（と、釘を刺し去っていく）

キミと蒲田、バックヤードから戻ってくる。キミは帽子を被っていない。それぞれ肉まんを持っている。

キミ　え？なんで？　なんで食べないの？
蒲田　だって…
キミ　美味しいよ。
蒲田　でも…
キミ　これなんか凄いよ。奥能登産の高級しいたけを使った、こだわりの極上肉まん。
蒲田　だからだよ。
キミ　あ？
蒲田　これだってあの子が…（自分の肉まんを見る）
キミ　でもしいたけだよ？（自分の肉まんを食べる）
蒲田　でも、
キミ　（食べながら）こうして減らしていかないと。まだまだあるよ。

蒲田　…あ。そのためにパーティーを？
キミ　あ？
蒲田　そのために、しいたけを集めて、
キミ　ああ、（何か言おうとして）
コズＮ（声）（喘ぎ声）
蒲田　…え？
キミ　ああ気にしないで。瀬尾、あれを。
瀬尾　ああ。（と、ポケットから写真を数枚取り、キミに渡す）
キミ　さっき瀬尾に頼んで、あんたの部屋から持ってきてもらった。（写真を見て）あ、ほらやっぱり。（蒲田に写真を見せて）これ、あんたんちの向かいに越してきた、
蒲田　あ…
瀬尾　盗撮写真だな。
蒲田　いえあの、
コズＮ（声）（喘ぎ声。窓から少し傘立てとの情事が見える）
瀬尾　この変態野郎が。
蒲田　いやこれは、
キミ　やっぱり助平か。
蒲田　これはその、
キミ　とりあえず許してやるから。私の言うことを聞いて。その子をここに、連れてきて。
蒲田　え、この子も肉まんに？
キミ　ううん。この子は違うから。
コズＮ（声）（喘ぎ声。傘立てとの情事が盛り上がる）
蒲田　……え？
キミ　いいから明日、連れて来い。（肉まんを投げ渡し）これもやるから。連れてくるだけでいい。
コズＮ（声）（一段と喘ぐ）
蒲田　（出入り口を出ると、喘ぎ声に対し）あ、でも、
キミ　気にするな。行け。
蒲田　あ、はい…！（しかし情事を見る）
コズＮ（声）（絶頂に達する直前か）
キミ　見るな！
蒲田　はい！（出ていく）

蒲田去り同時に、音楽イン。窓からは情事がチラチラ見える。

キミ　瀬尾。あとは一人にしてやろう。（窓のロールカーテンを下ろす）
瀬尾　ああ。（カウンターの箱を崩す）

キミと瀬尾、下手前に去っていくと同時に、映像イン。

---

**FILM　新ＣＭ**

音楽のままＣＭ。女タレント。

女「もう何にも、邪魔されない。世の中のことは何も、気にしない。ただ、大切な人と過ごす日々を。」

幸せそうな、夫婦や恋人の画像。

女「新しいライフスタイル。立てこもり。大切な人の命を脅かすだけで、それが手に入ります。」

拳銃、刃物、ロープなどで、相手の命を脅かす画像。

女「ただいま全国各地で多発中〜。さああなたも。」

センスのちょっと古いCM。

---

**立てこもり**

シーン「中小企業」の社員1とマイメロディ、並んでロープで縛られ、刃物を持った社員2に蹴られながらやってくる。

社員2　さすがですね。いいCMじゃないですか。
社員1　…そう？
社員2　世の中のニーズを的確に捕らえた広告ですよ。
社員1　…ちょっと古臭くない？
社員2　（刃物をチラつかせながら）誰だってこうやって、好きなものだけと暮らしたいですもん。
社員1　（ひいとなりながら）でも、どうやって暮らすの、
社員2　（刃物を向け）え？
社員1　（ひいとなりながら）もう何の補償もないし誰も要求なんか聞いてくれないし、差し入れなんかも持ってきてくれないよ、どうすんの。
社員2　いいんですよ、そんなの。（マイメロを可愛がりつつ）誰も先のことなんて気にしないんです。それがトレンドです。
マイメロ　（泣きそうな表情）
社員1　…。
社員1　やっぱり津久井先輩って凄いんですね。
社員1　え？
社員2　津久井先輩。
社員1　あ、あのCM、先輩が？
社員2　はい。津久井ケンZ先輩が。
社員1　…え？　ケンジ先輩でしょ？
社員2　いえ、ケンZ先輩です。
社員1　ゼット？
社員2　はい。…苦労されたんですね、きっと。
社員1　え、何言ってんの？　どういうこと？
社員2　もう後がないですもん…
マイメロ　（隙を見てロープを解き、逃げようとする）
社員2　（素早く）待って！
マイメロ　（振り返り）あなたの利己的な行為は本来許されざるものだが果たして利己的行動と利他的行動の間、或いは自利と利他の間にある適応度、適応性とは具体的に何なのか、共に考えてみませんか。
社員1　…

マイメロ　（二人に）利他主義者は「隠れたエゴイストである」とも言われるが実証主義の創始者であり「社会学の父」とも称されるコントは、ラテン語の他者、アルターから「オルトイズム」という言葉を作り、
社員2　（マイメロの肩に手を置く）
マイメロ　？
社員2　かわいくない。（その首を刃物でかっ捌く）
マイメル　（喉から叫び声を漏らし、血を吹いて倒れる）
社員1　（悲鳴。そのあと）…ああ……、
社員2　やだ！漏らしちゃった？（社員1を蹴り飛ばし）もう、しょうがないな。お風呂場行こう。ほら。
社員1　…、

社員2、社員1を連れて下手、部屋の奥に去っていく。

---

**文化**

窓の外を、アロハシャツに麦わら帽子を被った佐久間が通って、ドアチャイム音。

佐久間　すみません、隣の部屋の者ですけど。いらっしゃいます？
（顔を出して）突然すみません、さっき帰ってくるのが見えたもので…（マイメロに気づく）
あっ、やだなに？え、大丈夫？（思わず靴を脱いでマイメロに駆け寄る）
マイメロ　（起き上がり）あ、大丈夫です。キャラクターマスコットである私は言わば概念ですので。
佐久間　えっ、
マイメロ　概念です。つまり思考において把握される物事の「何たるか」という部分であって、抽象的かつ普遍的に捉えられた、そのものが示す性質です。
社員2　（戻って来て）あ。
マイメロ　（社員2に）例えば「ゼロ」の概念は「無を数える」とはどういうことかという考え方に関する理解と言えます。そういった文脈で言えば私は、
社員2　かわいくない。（刃物を振り上げるも）
マイメロ　（脱兎の如く幻のように、素早く部屋を出ていく）
社員2　（刃物を仕舞って佐久間に）佐久間さん、何か用ですか？
佐久間　え？…ああ。ごめんなさい勝手に。ちょっとお醤油切らしちゃって、
社員2　ああ。（棚に向かう）
佐久間　ちょっとだけお借り出来ないかと思って。あ、原油でもいいんで。
社員2　（棚から醤油を取って）いいですけど。蓋、全然開かないですよ。
佐久間　ああ。
社員2　それでもよければ。（渡す）
佐久間　ありがとう。（受け取る）
社員2　ところでどうしました？その格好。
佐久間　え？
社員2　旅行かなんかですか？

アロハシャツにパナマ帽を被った胡散臭い男性（彼氏）、窓の外を通る。

佐久間　（笑って）やだ私いっつもこうよ。っていうかずっとこう。じゃ。（行こうとする）
彼氏　（顔を覗かす）どうした？悲鳴が聞こえたけど何かあったか？
佐久間　あ、大丈夫。はいこれお借りしたから（彼氏に醤油渡して）部屋で待っててって、

彼氏　（遮って社員2に）あ、こりゃどうも初めまして。突然すみませんね、ありがとう。おや。お隣さんは…
佐久間　（慌てて）ええそうなの。しいたけじゃないんだけど、でもいい人よ。
彼氏　（怪しむように社員2を見る）そうですか。
佐久間　（彼氏に）さ、行きましょ。
彼氏　（部屋に上がり込み）さっきも何か男の悲鳴のようなものが聞こえたけど、この部屋じゃないのかな。
佐久間　きっと違うわよ、さ、
社員2　どなたなんですか？
彼氏　ああ先日から佐久間さんとお付き合いさせてもらってるしいたけだ。いつもは外でディナーを取るんだが、佐久間さん自慢の手料理が一度どうしても食べたくてね。
社員2　え、
彼氏　（佐久間に）うん、やはりこのアパートは引っ越した方がいい。部屋も随分と狭いしこの辺は恐らく治安が
社員2　佐久間さん、しいたけと付き合ってるんですか？
彼氏　なんならウチに来ればいい。菌床もいくつかあるし。遠慮しないで。
社員2　キンショウって、菌の床って書く、菌床ですか？
彼氏　（佐久間の手を取り）或いは、…僕と同じ菌床でもよければ、一緒に暮らしましょう（手の甲にキスする）！
佐久間　でも佐久間さん、
社員2　…嬉しいわ、有難う…！
佐久間　菌床で暮らせるんですか？　オガクズに米ぬかとか混ぜたものですよ。
社員2　（即座に）暮らせるに決まってるじゃない、何言ってるの。
佐久間　だって、
社員2　（社員2だけに）私もしいたけだから。
佐久間　でも、
社員2　（威圧的に）しいたけなの。
佐久間　あ、はい…。

下手奥の方から唐突に、大人数の笑い声や歓声などが聞こえる。

佐久間　（驚き）なに？
社員2　ああそうだ！こないだ連れて来ちゃったんです。佐久間さんも好きでしたよね？　ほら2、5次元の、
佐久間　え？
社員2　ミュージカルですよ。その全キャストと全スタッフです。もう私も凄い好きだったんで。
彼氏　（聞こえている大勢の声に対し）え、どこから…
社員2　そこのクローゼットの中です。ゴルミュのみんなです。
彼氏　ゴルミュ？
猿　（プロゴルファー猿の衣装だがイケメン。奥から出てくる）
佐久間　（奇声。卒倒）
猿　あ、すみません。今、リハーサルが一通り終わったんで。
彼氏　リハーサルが。
猿　ええ。（社員2に）お水を八十四人分もらってもいいですか。
社員2　どうぞどうぞ。
猿　（端の方の水道に水を汲みに行く）
彼氏　え、そこにそんなに（見に行ってみる）
社員2　（佐久間に）ねえ見て行きません？何度見ても最高ですよ。
佐久間　（なんとか気を取り戻し）あ、私はいいわ。いい、

社員２　え、凄いハマったって言ってたじゃないですか。歴代キャストにも凄い詳しくて、前に見たやつはスタッフワークがいまいちって怒ってたじゃないですか。

佐久間　は。

社員２　大丈夫です。脅して連れて来たけど今は公演の機会がないから喜んでやってくれるしキャストもスタッフワークもバッチリです。

佐久間　（水を運ぶ猿を見つつ）私は、興味ないから（なんとか立ち上がるもテンションと感情が滅茶苦茶になる）

彼氏　（戻ってきつつ）え、なんだ？佐久間さんはこれが好きなのか？

佐久間　いいえ全然、わからないわ、てんで、

彼氏　ああ、そうだよな。僕もだ。

佐久間　だって感情移入とか出来ないもの。全然いいと思わない。話も台詞も歌も踊りも、

猿　（言い終わらぬ内に戻ってきて）

佐久間　（反応）

社員２　（同時に猿に）ねえちょっと見せたげて。

猿　（ミュージカル的に歌い踊る）ワイは　猿や　プロゴルファー　猿や

佐久間　（条件反射的にピッタリと同じ振りを踊る）

彼氏　佐久間さん？

佐久間　全然いいと思わない、

彼氏　だよなあ。

猿　（美しく歌い踊り終わる）チャー・シュー・メーン。

佐久間　（大感動）

猿　後で会おう（奥に去っていく）

佐久間　（よく分からない奇声をあげつつ猿を追う）

社員２　あ、あと前に佐久間さんが好きだって行ってた小説と映画のDVD、そこに全部揃ってます。前に今度貸すって言ったまんまで（棚を見にいく）

佐久間　え、

社員２　あとこの漫画も全巻、（見せる）

佐久間　嘘、（と駆け寄りそうになるも）

彼氏　ああその辺はね。全部読んだことあるよ。でも僕はちょっとダメだな。

佐久間　あ、（命からがら踏みとどまるか這いつくばって）私も全然、

社員２　（彼氏に）この辺の本も全部ですか？

佐久間　（踏みとどまったまま）ああ。このしいたけ、作家なの。あんまり売れてはいないけど、いいのを書くの。ほら何だっけ、胞子がね（こう、ひらひらと）ね。

彼氏　うん。どんな作品にも（足元を指し）確かな石突きに基づく普遍的な命題や、（頭を指し）それぞれの繊細なヒダを震わすものがないと。

社員２　そうですか？

彼氏　うん。もっと勉強するといいよ。そうしたらわかる。

社員２　でも。

彼氏　うん。我々の作品にもっと触れてみるといいよ。（社員２の手を取り）まずその良さに気づくことだね。我々にしか書けないものがあるんだよ。そこにこそ真理がある。

佐久間　（なんとか気を持ち直し、同意）

社員２　はあ…。

彼氏　しいたけ歴代の優れた書籍を読むといい。ああ、どれも心振るわす名著だよ。僕は大好きだね。

社員２　あ。（彼氏の匂いを嗅ぐ）

佐久間　（彼氏に）さ、もういいわ。私の部屋に行きましょう。

社員２　ちょっと待って佐久間さん、この人しいたけじゃない。

彼氏　（反応）
社員２　（急ぎ棚から図鑑取り）ほらこの図鑑見て。ツキヨタケ。しいたけによく似た見た目だけど、
彼氏　（図鑑を奪って）何を言う。
社員２　そこら辺のブナの枯れ木とかにいっぱい生えて、
彼氏　（反応）
社員２　間違って食べたら下痢や腹痛を起こします。
佐久間　（反応）
彼氏　いや、僕はしいたけだ。
社員２　（図鑑を奪い返し）違います。佐久間さん間違ってます。（佐久間に渡し）これツキヨタケです。
佐久間　（急ぎ図鑑のページをめくる）
彼氏　（佐久間に）いや、僕はしいたけなんだ。ほらよく見て、しいたけだよ、ほら、
佐久間　（図鑑を見て）あっ、あなた…
彼氏　違う違う違う違う、僕は、
佐久間　騙したのね。
彼氏　騙してない！（佐久間を抱き締める）僕は、
佐久間　あっ…お腹痛っ（腹痛）
社員２　私もなんか……（腹痛）
彼氏　……！
佐久間　そう言えばなんかいっつも、（彼氏から離れる）
彼氏　違う！　僕は、しいたけなんだよ…！
社員２　近寄らないで！
彼氏　僕は、
佐久間　（帽子を投げ捨てて）偽物だったのね！！
彼氏　あっ、佐久間さんあんた…！

同時に開演ブザーの音。

社員２　あ、
佐久間　信じられない！（と、泣いて走り出すも）
社員２　待って、開演します。
佐久間　（ピタリと立ち止まって）ゴルミュが？
彼氏　信じられない…！（と、泣いて外に走っていく）

彼氏と入れ替わりに、窓の外をトモが通る。ベトナムの帽子、三角の帽子を被っている。

社員２　あ、佐久間さんのお隣の、
佐久間　（打って変わって）あ、トモちゃん、いらっしゃいよ！一緒に見ましょう、名作ミュージカルよ！
トモ　え？　ああ。私はいいです。特に興味ないんで。
佐久間　名作なのよ！
社員２　始まります！

急いで奥に走り去っていく社員２と佐久間。入れ替わりに社員１、バスローブとヘアキャップを被った状態でこっそり戻ってくる。

社員１　あ。（こっそり急いで）すみません、なんかシャツとかズボン、借りられません？

トモ　え。誰ですか、
社員1　それかどっか店とかまで一緒に、
トモ　ああまあ、いいですけど。
社員1　ありがとう…！（裸足のまま急いで外に出ていく）

**向き**

トモと社員1、窓の外に居るまま、照明切り替わる。

社員1　（窓の中を見て）コンビニ？
トモ　はい、なんか呼ばれたみたいで。
社員1　あ、ここあれじゃないですか。連日豪華なパーティーが行われてる…

再びラプソディインブルーが流れ始め、コズN、奥からやって来る。

コズN　お待ちしておりました。さあお入りください。
社員1　…あ、なんかここにシャツとかズボン、短パンでもいいんで、ありますかね。
コズN　奥様がお待ちです。
トモ　奥様？（中に入って来ながら）
コズN　はい。ここのあるじ、パーティーの主催者です。彼女はあなたをお迎えするために。
トモ　私を？
キミ　（ゆっくりと奥からやって来る。帽子無し）トモちゃん…。
トモ　え？

コズN、一旦、奥に下がる。

キミ　有難う。来てくれて。
トモ　…誰？
キミ　やっと会えた。
トモ　……あ。（キミの服装はかつてのまま。気づく）
キミ　久しぶり。
トモ　え？何？　何で？え？（周囲を見回す）
キミ　全部、トモちゃんのために用意した。
トモ　（棚を見る）
キミ　何でも選んでいいんだよ。何でも好きに選んで。
コズN　（奥から沢山肉まんを乗せたお皿を持ってきて）奥能登産の高級しいたけを使った、こだわりの極上肉まんです。
キミ　ほら、これもトモちゃんのために。好きでしょ？肉まん。コンビニの肉まんの、いい方のやつ。沢山あるから。全部食べていいんだよ。
トモ　（肉まんを見て）ああ…
社員1　え。あなたがここの？　でも…（と、帽子を被っていないキミの頭を指差す）
キミ　しいたけは黙ってて。
社員1　え？（ヘアキャップを触って）あ、別にこれは、（それを急いで脱ぐ）
キミ　トモちゃんも。もうその偽物の帽子、取っていいよ。
トモ　え？

キミ　トモちゃんがそこのアパートで、帽子を被って生活してるって知って、だからパーティーを始めたの。毎日やったの。そしたらいつか、来てくれるかもと思って。
トモ　あー…
キミ　でもなかなか来てくれないから。だから…
トモ　そうだったんだ…。
キミ　ごめんなさい、私、（ポケットから漫画を出し）
社員1　（思わず）あ、何それ懐かしいな、凄い駄作だよ。漫画だったら俺がもっといいのを（漫画に手を伸ばす）
キミ　（その手を叩き）私ずっとこれ…
トモ　ああ…。
キミ　ずっと気になってたでしょ？　主人公のエチゴヤショーヤが、実は何だったのか。
社員1　（思わず）気にならないよ。
キミ　なるよ！
社員1　ならないよ。
キミ　（漫画を差し出し）ねえトモ、読んで。トモの番だよ。
社員1　あの、そんなん読むより、俺、もっといいの沢山持ってるからさ、
キミ　（社員1を退かしトモに）ねえ。やっぱりあんたもしいたけ文化に毒されてるの？　それ以外は受け付けない？
社員1　いやそういうの関係なしに、それ本当に駄作だから、
コズN　あっ…
キミ　（トモに）目を覚まして。受け取って。お願い。だってあんたはしいたけなんかじゃ、
コズN　その本…
トモ　（笑って遮り）ああそうか、ごめんごめん。違うの。私、矢印なの。
キミ　…え？
コズN　（やっと気づいて）キイちゃん…？！
トモ　ありがとう、凄く嬉しい。ずっと読みたかった。ずっと気になってたよ。（と、照れてか、首を横に傾げる）

　するとトモ以外、トモの三角のベトナム帽の先の向いた方に移動する。音楽、カットアウト。

キミ　え？
トモ　貸して。凄く楽しみ。（と、反対側に首を傾げる）

　トモ以外、反対側に移動。

社員1　え、矢印って…
キミ　あ、トモちゃん、首を傾げないで。
トモ　え？（反対側に勢いよく首を傾げる）

　トモ以外、反対側に移動。

トモ　あ、キミちゃん、どこ行くの、キミちゃん。
キミ　首を傾げないで、
トモ　え？（反対側に勢いよく首を傾げる。傾けたままになる）

　ここからトモの矢印によって、全員部屋を回り始める。音楽イン。以降、周りながら。

コズN　ああっ！キミ？キミなの？
トモ　ほら早く貸して。エチゴヤくんは何だったの？
キミ　ああ、あのね。エチゴヤは…（見えなくなる）
トモ　うん。
コズN　嘘、キイちゃん…！
キミ　エチゴヤは…

など言いながら壁の向こうを通り、また戻ってくる。ぐるぐる回る。いつの間にか瀬尾も加わる。

瀬尾　遂に会えたんだな。
コズN　キイちゃん！
瀬尾　遂に気づいたんだな。
キミ　だからお主も…（見えなくなる）
トモ　え、お主も？お主も何なの？
瀬尾　ああお主も（見えなくなる）
トモ　え？
キミ　（そしてちょうどトモの横を通り過ぎる時、ようやくトモの頭を押さえつけ）トモちゃん首を傾げないで！
トモ　え？

皆の移動止まる。音楽、カットアウト。

キミ　（呼吸を落ち着けつつ）トモちゃん…（トモの頭から手を離し、首を傾げないように警戒しながら）本当にごめんなさい、私、ずっと（漫画を渡そうとするも）
トモ　ううん私こそごめん！（一気に頭を深く下げる。矢印は真下を向く）

トモ以外、床に一気に伏せ倒れる。地面にめり込む。

トモ　（頭を下げたまま）ずっと気づいてあげられなくて、私のために色々してくれてたのに…
キミ　（床に伏せたまま）あ…トモちゃん、顔を上げて…
トモ　会いたかったよ…！（顔を上げる）
トモ以外　（立ち上がるも）
トモ　（頭を90度ほど下げて両手を差し出す）キミちゃん！
トモ以外　（口々に）あっ…

トモ以外、矢印の方向に一斉に遠ざかっていき、下手奥へ退場。

トモ　……（顔を上げる。誰もおらず）あれ？（周囲を見回し）キミちゃん？　キミちゃん？

**写真**

トモ　どこ行っちゃったんだろう。

と、そのまま首を一回転させた後、勢いよく上手に傾げたままになる。
すると下手前から、茶碗と箸を持った部屋着の夫婦が移動してくる。

トモ　（頭を上げて驚く）誰？
夫　…ん？　おかずはどこいった？
妻　…もともとそんなものないでしょ。
夫　ああそうか。
妻　（茶碗を見て）…それ言ったら米もないよ。
夫　（茶碗を見て）…ああそうか。じゃあなんで私らは茶碗と箸を持っているんだ。
妻　知らないよ。

瀬尾、蒲田の首根っこを掴んで連れて戻ってくる。

瀬尾　（夫婦を見て）ん？誰だ？
トモ　さあ。
蒲田　（瀬尾に）ねえ早くして下さいよ。
瀬尾　（蒲田を離し）ああ早く出せ。（トモに）今ぜんぶ消させるから。
トモ　え？
瀬尾　カメラのデータ。まだ持ってやがった。（改めてトモに）もう首を傾げるんじゃねえぞ。
蒲田　（デジカメを出して）どうやって消すのか分からないんだよな。（カメラを操作する）

するとスクリーンに写真画像。顔と手しか写っていない、かなりの接写で、フラッシュに驚いた顔の瀬尾、ソフトクリームを食べている。

瀬尾　あ？

次の画像、同じくかなりの接写とフラッシュと表情で、漫画か何かを読んで涙する瀬尾。以降、同じく野良犬か猫と戯れる瀬尾など可愛らしい一面の画像が次々と。

瀬尾　何だこれ。
蒲田　意外と可愛いところあるんですね。
瀬尾　お前盗撮下手だな、貸せ。（カメラを奪って操作）

同じく顔と手だけの接写とフラッシュに驚いた表情で、傘立てといちゃついているらしいコズN。

瀬尾　何だこれ。

次の画像、次の画像、と回すと、顔や手や足やどこか体の一部らしい肌色と、コンビニにある色々な物との、アクロバティックな情事の画像。

瀬尾　これは、何をしてるんだ？どうなってるんだ？
夫婦　（興味津々）

アメコミヒーロー的な衣装を来た社員1、戻ってくる。

社員1　あー酷い目にあった。（夫婦を見て）あ、誰ですか？（蒲田を見て）何見てんですか？
瀬尾　なんだその格好は。
社員1　あ、丁度そこにあったんで。

唐突にアメコミヒーロー物的な音楽でヒーロー登場。下着姿。やって来てポーズを決める。

社員1　（その風貌を見て）あ。
ヒーロー　（社員1の風貌を見て）あ。（しかしヒーローらしく）別に構わない。（全員に向き直り）ここに世界のあらゆる巨悪の不都合な真実を、ことごとく握りつぶした女がいるだろう。
蒲田　え、（瀬尾を見る）
瀬尾　ああ、だから何だ。（カメラを蒲田に渡す）
ヒーロー　お陰で世界中の多くの人々が酷い圧政や貧困に苦しんでいる。史上最悪の悪女だ。
瀬尾　彼女はただこのコンビニを作りたかっただけだ。
蒲田　（カメラを再び弄り出す）
トモ　あ、キミちゃんのこと？　キミちゃんはいい子だよ。凄く優しくて誠実で、
蒲田　（カメラを操作）あっこれかな？

写真画像、前と同様、顔と手のみ接写で、キミ、吸い殻のポイ捨て。ガムの吐き捨て。ゴミのポイ捨て。

蒲田　あっ違った…（カメラを弄る）
妻　（思わず）やだ酷い。

パチンコ店の外装写真から、人の出玉を盗んでいるところ。本屋の外装写真から、袋とじを破っているところ。前出の野良犬か猫を思いきり蹴る足。など、キミが悪さばかりしている様子。

夫　酷いな…、
妻　ええ。
瀬尾　キミ…。（箱に座る）
ヒーロー　（蒲田に）有難う。こいつか。（夫婦に）安心しろ、今、私たちが成敗を。（ポーズを決めると）

別のアメコミヒーロー的な音楽が流れてアメコミ女ヒーロー、社員1の隣でポーズを決める。

ヒーロー　（ポーズのまま）こっちだ。
女ヒーロー　（社員1に寄り添って）さあ悪者はどこなの？私たちが相手よ。
ヒーロー　（ポーズのまま）こっちだ。
社員1　（女ヒーローに）あの…
夫　（社員1に）早く成敗して下さいよ、
妻　（社員1に）あの酷い女を。
ヒーロー　（妻の肩に手を）いえいえ、
妻　（悲鳴）
ヒーロー　（妻を抱きとめ）大丈夫。私が成敗を、
妻　（悲鳴あげつつ）いやあ、
夫　（ヒーローに掴みかかり）あんた何してんだ！
妻　（ヒーローを突き飛ばすなど）やめて、変態！
ヒーロー　（夫の腕をひねり）落ち着いて、

女ヒーロー　Wait!!

女ヒーロー、ヒーローに殴りかかり、ヒーロー吹っ飛ぶ。夫婦も応戦。寄ってたかってヒーローを殴る蹴る。口々に激しく罵りながら。蒲田はカメラを操作し続けており、

蒲田　（カメラを掲げて）あ、あったあった！ありました！
瀬尾　（そうかと立ち上がるとヒーローらと夫婦に一喝）うるせえよ！
二人以外　（その迫力に一瞬で静まる）
瀬尾　（蒲田に）出せ。

写真画像、トモの写真。

トモ　あ…

やはり接写で部屋にいて、驚いた顔をしてる。窓の外から撮ったらしい写真。
顔半分しか写っていなかったり。やはり下手な写真。

瀬尾　よし。全部消せ。
蒲田　（カメラ操作）
社員1　あっ、ちょっと待って…（画像を差し）そこ。そこ、ズームとか出来ます？
蒲田　え、どうやるんだろ。（カメラ操作）

社員1「そう、そこ。それ」など言いつつトモの部屋の一角にズーム。
殺風景な部屋に、漫画本が並んでいる。
ズームしていくとそれは、「お代官ちゃまSOS」。その、全十五巻。
十三巻と十四、五巻が、床に転がっている。

社員1　…わあ、これ全巻持ってる人がいるなんて。凄い。確か十五巻で打ち切りですけど、誰も持ってないはずですよ、だって全く売れなかったし古本としても全然価値ないしで…（画面に釘付けに）
瀬尾　あんた……。
トモ　……あ。
瀬尾　もう、読んでいたのか。知ってたんだな。お代官ちゃまとエチゴヤショーヤが、何だったのか。
トモ　ごめんなさい。
瀬尾　なんで、
トモ　（遮って）だって私、嬉しくて。だから、（興奮してか、首を振り始める）
瀬尾　（首に合わせて振れながら）あ、やめろ。
トモ　キミちゃんが私のために、ずっと、（首を小刻みに振る）
他全員　（同じく振れながら口々に）何？やだ（など）
社員1　（振れながら）あ、ちょっと。首を振らないで。（トモの首を押さえる）
トモ　（止まる）
他全員　（止まる）
トモ　（しかしすぐさま激しく悶絶）ずっと！（更に激しく首を振り始める）
他全員　（更に激しく触れ出す）あああ……

音楽イン。そのままダンス。

ダンス中、ヒーロー男女はそれぞれ一足早めに逃げ去る。
トモの興奮が落ち着き、頭を下げたトモによって、全員床に伏せ、ダンス終わる。

トモ　ごめんなさい！ごめんなさい！（頭を上げて、逃げ去っていく）
社員1　あ、
瀬尾　おい、

全員、立ち上がる。しかし夫婦のみ全く起き上がれず。

夫　ああもう駄目だ…。
社員1　え、どうしました？大丈夫ですか？
妻　私たち何も食べてないの。もうずっと…。
瀬尾　おい、とりあえず水と、何かすぐ食べられるものを。
社員1　あ、はい。

瀬尾と社員1、「何か柔らかいもの」「ゼリーは」等口々に言いつつ棚から何か探し夫婦を介抱。
緊急放送のチャイムオン。映像インする。

---

**FILM　国ぐるみ**

緊急中継。国会議事堂。パトカーや消防のサイレン。
議事堂の屋根にズームしていくと、屋根の上にケンZが立っている。風に吹かれている。

ケンZ「誰も近づくな」

社員1　あ、ケンZ先輩…？
瀬尾　ゼット？

ケンZ、「与党」「野党」と書かれた、大きな干ししいたけパックを掲げる。
そこから数個取り出して更に掲げる。

ケンZ「こいつらがどうなってもいいのか。あ？焼くぞ。煮るぞ。近づくな」

そして干ししいたけを割る、噛みちぎる。周囲の人々の悲鳴。舞台上も悲鳴。そしてそれを全て放り出し。

ケンZ「言う事を聞かなければ、日本全土に除草剤を撒く。だから誰も動くな」

周囲、舞台上、静まる。

ケンZ「…そうだ。全国民、全員、動くな。（間）そのまま静かに。そうだ。何もするな。何も言うな」

静寂。間。

ケンZ「そのままだ……。そのままそうして、普通の暮らしを送れ。送らせてくれ…。」

上空を見上げるケンZ、カメラ画像も上に。すると議事堂の天辺にビーチフラッグの旗が立っている。

**駄作**

瀬尾　…あれ何だ？
社員1　…ビーチフラッグの、旗？

コズSとキミ、へとへとの様子で戻ってくる。コズSは大事そうに傘立てを抱えている。
キミはトモの首根っこを押さえ込み、連れている。矢印帽子は剥いで、片手に持っている。

コズS　瀬尾さん、キミが本当にお世話になって。
キミ　トモちゃん、会いたかったよ。（トモを放り出し、矢印を窓の外に投げ捨てる）
コズS　（社員1に）その格好は？
社員1　あ、気にしないで下さい。
コズS　私たち、三人で暮らすことにしたんです。
瀬尾　あ、でもいま旦那さん…（と映像を見るも）
コズS　いえこの人（傘立て）と。
瀬尾　（傘立てを見て）…はあ。
コズS　だからもう、大丈夫です。これまで色々と、有難うございました。私たち、小さな住まいでいいんで。静かに一緒に、暮らしますから。（傘立てに）…ね。
瀬尾　そうですか…。（キミを見る）
キミ　（コズSから離れトモの方へ）トモちゃん。やっと渡せるね（13巻をポケットから出して差し出し）はい。
社員1　あっ、
キミ　なに？
社員1　…いえ。
瀬尾　キミ。トモちゃんは、
トモ　（瀬尾を制し）ごめんなさいキミ。私、知ってるの。…全部。
キミ　え？

少し間。

トモ　だって…。（両ポケットから、14巻と15巻を取り出す）
キミ　……は（腰を抜かすほど、声も出ず、とても驚く）
社員1　……！（希少本を間近に見てちょっとテンション上がる）
トモ　多分、私一人しか持ってない、幻の十四、五巻。
キミ　なんで……、
社員1　だって酷い出来だもん、誰も覚えてないし読む価値なんて全然、（思わず漫画に近づき）
キミ　（社員1を突き飛ばし）どうなるの？！　お代官ちゃまとショーヤは、エチゴヤショーヤは、
トモ　…ほんとに知りたい？　あの後、二人がどうなったか。
キミ　（激しくうなずき）勿論、お願い、
トモ　（思い出し笑い。何度も）
キミ　え、なに！なんなの！教えて！（本を奪い取る）
トモ　あのね。…あの後なんとお代官ちゃまが、
キミ　（目を輝かせてページを捲る）

キミ、続きを読み始める。歓喜の表情。良かったわねと思うコズS。良かったなと思う瀬尾。

同時に銃声。場が止まる。
頭を撃ち抜かれて、キミ、崩れ倒れる。
周囲、何が起きたか分からない間。やがて妻の小さな声が聞こえる。

妻　あん（た…）

全員、妻の方を見ると、その隣で夫が拳銃を持っている。場が動き出す。

コズS　キイ（ちゃん…！）キイちゃん、（キミに駆け寄る）
瀬尾　（素早く駆け寄りとりあえず夫の銃を取り）あんた何を、
夫　駄作なんだよ！
全員　……（？）
夫　駄作なんだ！　本当に！　特に十四、五巻はもう…、本当に…
全員　……（？）

何だか分からないままの間。社員1が何だか分からないまま喋り出す。

社員1　…ええ確かにとんでもない駄作ですけどでもなんで（と、改めて夫の顔を見て大きく息を吸う）…！
夫　木戸、マッチョ先生…！
トモ　悪は成敗されなきゃいけないんだ！　全部捨てて燃やせ！
妻　…え
夫　あんた…。
妻　な。信じらんないほど、つまんなかったろ？　くだらなかったろ？　な。
社員1　あんた、
夫　だからってこんな、
社員1　だって絶望するでしょ！
トモ　13巻の時点で絶望ですよ！　つうか1巻目からもう、
夫　しませんでしたよ。絶望。
夫　え、

少しの間。

トモ　ファンです。
夫　あ…（漏れる意味のない声）
トモ　私も、（キミを見て）キミちゃんも。
夫　…でも、本当に駄作だから……。
社員1　（それは確かに、そうなんだけど、と思う）
瀬尾　（夫の様子を見ながら）…でも、世界中が知りたがってますよ。
夫　え？
瀬尾　その、幻の十四、五巻。
夫　なに？

瀬尾、コズNに拳銃を渡し、去っていく。同時に厳かな鐘の音が聞こえ始める。

**FILM　聖典**

中継画面、切り替わり。

アジアの国々の寺院に、お主もワルよのうのお経が厳かに響き、
聖典として「お代官ちゃまＳＯＳ」の13巻が祀られている。

中東の国々のモスクに、お主もワルよのうのコーランが高らかに響き、
聖典として「お代官ちゃまＳＯＳ」の13巻が祀られている。

ヨーロッパの国々の教会に、お主もワルよのうの讃美歌が美しく響き、
聖典として「お代官ちゃまＳＯＳ」の13巻が祀られている。

そして海外ニュース映像。英語で話すキャスター。日本語字幕で。

キャスター「各国要人と懇意になった津久井キミが世界に広めた教えの書、「お代官ちゃまＳＯＳ」13巻ですが、
その幻の十四、五巻を探し求める信者たちが、今、各地で集い、一斉に巡礼に出ました」

旅立つ大人数の信者たち。

**野次馬**

映像から目が離せないまま、慄く夫。

夫　何だ、これ…
妻　あんた……
トモ　（唐突に落ちた二冊を拾って走り出す）
夫　（咄嗟に）待って！
トモ　…。（止まる）
夫　…それじゃなくて、今、新作を書いてるからね。それを…
トモ　（走り出す）
夫　（咄嗟に）待って！
トモ　…。（止まる）
夫　それじゃなくて、今、新作を書いてるからね。（自信のある様子）だからそれをね…
トモ　（走り出す。そのまま出ていく）
夫　あっ待って…！（追っていく。窓の外で）今、新作を書いてるから！（追って去る）
妻　（夫を追おうとするも一旦止まって、社員1を見る）あんた…。新作も駄作よ……。
社員1　えっ…。
（夫の去った方に向き直り）更に、とんでもない、駄作なのよー！（追っていく）
社員1　ちょ、どんだけ駄作なんですか、ちょっと見たいんですけど……（追っていく）
コズＳ　あ。（慌てて銃を構えて）待って、殺してやる、待って、（追って走り去ろうとするが、傘立てはキミのもとに置いていく。キミに被せるか乗せるかして。）待って！（追っていく）
蒲田　あっちょっと（なんとなく追いかけるが）

同時に歓声がして、入れ替わりにプロ野球選手、やって来る。シーン「店外」同様に。

選手　（倒れたキミに気づき）は。どうされたんですか、これは。今、走り去っていった人たちはいったい…
蒲田　…え？
選手　あ、お久しぶりです。あの時の、
蒲田　えっ？あ…（ユニフォームを見るか、応援の音楽や歓声を聞いて驚き）あんた、プロに？
選手　はい。
蒲田　はー。

スタジアムの歓声。

選手　いったいこれはどうされたんですか、教えて下さい、私に出来ることなら何でもしますから。今回こそは。
蒲田　あ、ああ。
選手　だから何があったのか。全部、私に教えて下さい。さあ。
蒲田　はい、あの、（懸命に考えてみる）…。何から言ったらいいかな…

同時にカキーンと野球の打撃音。歓声。

選手　ああっ、また外野フライが！（走り出すも）：いや、ホームランか。（戻って来る）
蒲田　あ、（再び考えようと）

スタジアムの歓声。

選手　いやフライか！（悔しくも走り出し）くっ、申し訳ない！くそっ！何でまた…
（残念そうに蒲田を見て）オーラーイ……！（走り去っていく）

歓声と共に去っていく選手。静かになる。
残された蒲田、キミを見つめるも何をすべきか分からず。音楽イン。
蒲田、ただこの場を去っていく。軽快な前奏の間、しばしキミのみに照明が当たる。
音楽のタイミングで、照明カットアウト。

## ENDING

沢山の本のページが風で捲れる。
１９２０年代アメリカ風の風貌の男女、その中を軽快に踊る。

沢山のほだ木。ほだ木に生える沢山のしいたけ。その上をヘリコプターが飛ぶ。

OPENING同様、「ノーマル」の類義語の数々。

議事堂の天辺に、ビーチフラッグが旗めく。
議事堂の屋根で、ケンZ、膝を抱えて座っている。
タイプライターの前で、蒲田。書くことがなく座っている。

キャスト紹介。全員終わると舞台上明るくなり、キャスト一同、並ぶ。
そして一礼。
音楽終わりで、一斉に走り去る。

## Written/Directed

一十口 裏

## Cast

津久井キミ・・・他多数　藤岡 悠芙子
津久井コズエ・・他多数　丹野　薫
津久井ケンジ・・他多数　春原 久子

佐久間・蒲田・・他多数　河野 美菜
瀬尾・・・・・・他多数　植木 早苗
警官・・・・・・他多数　三明 真実
トモ・・・・・・他多数　久保田 琴乃
木戸マッチョ・・他多数　柏尾 志保